
静かなる老人

めけめけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

静かなる老人

【Nコード】

N2404Y

【作者名】

めけめけ

【あらすじ】

東北地方太平洋沖地震による東日本大震災。未曾有の被害をもたらしたこの巨大地震、そして津波は、人的物的被害、それに伴う経済社会に対する影響は計り知れないものがある。今なおその爪あとは深く、多くの問題を抱えながらも人々は前に進むことをやめるわけにはいかない。

2011年3月11日14時46分18秒から始まった非日常は、今も日常として続いている。私はその非日常の始まった日の出来事

を一つの物語としてここに書き綴る。

あの日世田谷から渋谷、そして品川までの道のりで何を見、何を聞き、何を感じ、何を考えたのかを。

仕事先で被災した主人公は、交通機関の麻痺する中、どうにかして家に帰ろうとする。そんな中、一人の老人と出会い、行動を共にする。最初は多少鬱陶しく感じていた老人への気持ちは、非日常の混乱の中、少しずつ変化を始める。

はたして現実なのか夢なのか。主人公は老人と不思議な短く長い旅をすることとなる。

東北地方太平洋沖地震（前書き）

こういうものを「文学」と呼ぶのか 或いは「ホラー」なのか 私にはよくわからないが、文学としてきつちりとしたものでもなければ、ホラーと呼べるほど怖いことはない。しかし、この世のもではない何かが出るといえば出るし、夢や幻程度であれば、それはホラーとはいわない。【このお話は怖い夢をみました】というものと、なんらかわらないかもしれない。強いて言えば、そういうジャンルの物語です。

東北地方太平洋沖地震

平成23年3月11日14時46分18秒。日本が揺れた。後に東北地方太平洋沖地震と呼ばれる大地震は、地震の規模、そしてそれに伴う津波の大きさは想像をはるかに越えた『想定外』のものであった。この震災による被害の規模は一ヶ月を過ぎた4月中旬でも死者・行方不明者の正確な数字は把握できていないほど甚大なものであり、また、更に深刻な問題として福島原子力発電所の事故による今後の影響は、経済、地域社会、人体に対する放射能の影響などを考えると震災そのものはその後も続く余震のごとく、まったく終わりが見えてこない。

普段は事務所での仕事が多い私は、震災が起きたその日に限って外出先しており、不慣れな土地で地震に見舞われた。そして私は都内の交通網が完全に麻痺する中、いわゆる帰宅難民となり、現場から8時間かけてようやくの思いで、自宅ではなく、両親の住む実家に帰ることができた。

実家のある品川にたどりつくまでの間、実家にも江戸川区に住む家族にも全く連絡が取れなかったのだが、twitterを使つて何人かの知人と連絡を取ることができた。その中に幸い、我が家の近所に住んでいる前の会社の同僚がおり、連絡が取れない家族の様子を見に行ってもらうことができた。普段であれば一日連絡が取れないくらいで、右往左往する必要はないのだが、しかし、あれだけの揺れ、しかも毎週金曜日は、小学4年生の娘が塾へ行く日なのだが、ちょうどその時間とぶつかっていたために、家族の安否がどうしても気になっていた。

私は地震が来たそのとき、東京世田谷区の豪徳寺駅から歩いて数分のクライアントのところで、通信回線工事の立会いに借り出されていた。震災の規模がどんなものなのか。尋常ではないことはtwitterの書き込みで知りはしたものの、まったく実感がわかなかった。テレビやラジオを見たり聴いたりした人の断片的な話を聞いても、それがどこまで深刻なことなのか、全くつかめないでいた。しかし作業が終わり、帰り際に目に飛び込んできたクライアントのテレビの映像は、想像をはるかに越えるものだった。が、それを現実として受け入れられるようになるのは、そこからバスに乗り、数時間かけてようやく渋谷駅に着いたときだった。

渋谷駅は帰宅しようとする人々で溢れかえっていた。良くこの状態でなにも暴動とか起きないものだ、と、感心するほど、みんなが冷静であつたのには驚かされた。たぶん日本以外ではこうはならないだろう。ホテルなどの人を収容できる施設が、帰宅難民の一時受け入れを始めたニュースが入ってきたのは、豪徳寺から一駅歩いた経堂駅から渋谷に向かうバスの中だったが、それがどういう意味を持つことなのかはそのときにはわからなかった。すっかり道路は渋滞し、はたして本当に渋谷駅につく事ができるのかという不安というよりは諦めムードの中、それでも渋谷駅についたときには、ここまで座ってこれた幸運に感謝し、3時間近くも立ちっぱなしの年寄りには、本当に申し訳ない気持ちになった。だが、私が席を譲ることはできなかった。席を譲るためのスペースが、バスにはなかったからである。

実家にたどり着くまでの8時間あまりの道のり。私の半径5メートル以内でおきた非日常的な出来事の数々。私はその中で、ただひたすらに妄想にふけるしかなかった。しかし、そうした妄想のほうかはるかに現実的で、日に日に明かされる事実は、どちらが現実でどちらが妄想なのか、はたまた夢なのか、わからないほどに『こ

の世界』は変わってしまった。

私は物書きだ。物書きは物書きの視点で見たこと、聴いたこと、そして考え、思い、感じたことを書かなければならない。震災の日、そして震災以後の世界。その中で前に進むための糧となるようなことを書かなければならない。或いは、間違ったこと、不条理な事があれば、それらに対して警鐘を鳴らさなければならぬ。そのどちらの条件も満たすようなことを書ける時期では、今はまだないと思うながらも、それでも私は書かずにはいられない。

今書きたいと思ったことは、今書かなければ二度とかけない。

その思いが私を突き動かし、私はあの日の出来事を一つの物語として書くことを決意した。この物語は、『震災』という出来事をテーマにしているが、新聞やテレビに報道されているような巨大なエネルギーによる破壊、自然の驚異の前に命を落とした人々、残された人の悲しみといったスケールのものではない。もっとより内面的であり、間接的であり、しかし、それがゆえに人の想像や妄想の範囲内の視野で見える世界。そういった物語を書こうと思う。

それで果たしていいのだろうか？ という疑問にさえなまれながらも、しかし、私は書かずにはいられない。この物語は決して被災地の方を勇気付けるものでもなければ、心を暖めるものでも、心を躍らせ、辛い気持ちをやわらげるものにはなりえない。私は、こういう形でしか、今は書けないのだから、書ける物を書く。ただ、それだけである。それが正しいかどうかは、きつとこの物語を書き終えたときにしか、わり得ないのだから。

震災に遭われ、今なお避難生活を強いられている多くの皆様に心から御見舞い申し上げます。そして震災で命を落とされた方、心よりご冥福をお祈りします。

平成23年4月15日

めけめけ

第1話 豪徳寺14時過ぎ

> i 3 4 2 1 3 — 1 6 4 4 <

「じゃあ君、そういうことで、宜しく頼むよ。それにしても遅いなあ、工事業者」

院長はイライラしていた。このタイプは人を待たすことはあっても待たされることは嫌いだというタイプだろう。噂には聞いていたが、会ってまだ1時間ほどしかたっていないが、どんな人物なのか大体つかめた。

「1時から3時とか、そういう風にしか、指定できませんからね。遅れることはあっても早くなることはなかなか……特に3月4月は引越しシーズンですからね。工事、押しているんでしょう」

気休めでしかないが、会話を工事業者が来るのが遅いという話にもっていったほうが、面倒がなくていい。こういう不快な待ちの間を共有すると、こちらの不備を一つ一つ見つけては、ああだ、こうだと注文をくけてくる事だってありえる。前任者はすっかり院長を怒らせたらしく、その尻拭いにきた自分としては、なるべくことを穏便に済ませたい。前任者の悪口、工事業者の悪口、ここはそれで乗り切るのが吉だろう。

「だって、オレ、いったんだよ。診療時間とかあるから、この時間じゃなくちゃ困るって」

そんなことをいちいち電話会社が対応していたら、それこそ予定通りになんか行くはずがない。それにしても面倒なことになった。こちらの作業は30分もかからないというのに、いや、正直10分もあればできる作業なのだ。1時からの作業だと指定を受けてきたものの、肝心の工事業者が来ないのでは、院長の愚痴を延々と聞き

ながら待つしかない。できれば、早く帰りたいものだ。

「じゃあ、申し訳ありませんが、わたしは次がありますので、あとは川島が引き継ぎますので、宜しく願います」

前任者が諸般の事情で会社をやめ、その引継ぎはあまりスムーズにはできていなかった。付き添いの戸田部長は次の商談のアポを2時半に控えていた。もう2時になるうとしている。小田急線豪徳寺駅から東西線茅場町までは40分ほどかかる。遅刻だ。

「じゃあ、あとよろしくね」

『凡庸』というのが戸田部長の周りからの評価だ。良くも悪くも普通。私はそういうところがあまり好きではなかった。営業をしていれば多少の無茶は必要だ。その意味では前任者の中島という男は手段を選ばなかった。トラブルも多かったが、その分営業はとってきていた。火消し役となる上司や同僚がいるからこそその無茶なのだろうが、私にとっては、そのくらい振り切れていたほうが、計算がしやすい。欲のある人間は、付き合いやすい。

戸田部長が医院を後にした後、午後の診察を受けるために、4人の患者が入り口のところに立っていた。みんな年寄りばかりである。2時から午後の診療受付が開始する。完全にスケジュールオーバーだ。「どうしよう。患者さん来ちゃったよ」「大丈夫ですよ。今お使いのシステムはオフラインでも機能しますし、回線が途中で切り替わっても影響ありませんから、業務には支障はありません」

本来はオンラインで使っているべきシステムが、まだ完全に稼働していないのは、前任者の積み残した宿題のせいなのだ。今日ようやくその光回線が院内に引き込まれることになった。通信機器の接続設定をちよつと書き換えるだけの作業ではあるが、そういった機器は直接医院の人間には触れないようにしてもらっている。セキュリティ

リテイという言葉は、こういうときに便利でもあり、また不便でもある。

「どうぞ、受付を始めていただいて結構ですよ。私は外で工事業者が来るのを待ちますから」体のいい言い訳で、私は院長の愚痴から逃げることに成功した。スタッフが休憩から戻り、受付が始まった。14時20分、『そのとき』が訪れる前兆はどこにも見当たらなかった。何気ない日常のなんでもないような時間が過ぎていくだけだった。

第2話 14時46分 最初の揺れ

「川島さん、今電話があつて、前の現場今終わったつてよ。10分くらいで着くつて、回線業者からの電話！」

「はい、わかりました。じゃ、もう少しですねー。ここで待ってまーす」

「すまないねえ。じゃあ、業者が着たら、あとはよろしくー」

「終わりましたら、報告しまーす」

携帯を見る。2時30分……予定通りならとつくに事務所に戻っている時間だ。

「まったく、回線の工事なんて、3月とか引越しシーズンにするなよなあ。まあ、そうは言つても、こればかりは仕方がないか」4月からオンラインでスタートするためには、ここ数日でインフラは整備しておかないと、土壇場ではたつくのはできるだけ避けたい。

「俺は、他の奴とはちがう」

私は自分が担当する現場はできるだけトラブルのないように収める主義だ。成績としては戸田部長のそれと売上のには変わらないし、前任者には及ばない。だが、一度契約した商品をすぐさま解約されるようなことは一度もなかった。それが唯一私のプライドだ。医院では2時に受付を開始し、2時半から診察が始まった。患者はほとんどが年寄りだ。世田谷の閑静な住宅街。どの家も自分より金持ちに違いないと思うとどうにもやる気がそがれる。心の中でそんな悪態をついた後、携帯のメールをチェックしながら回線業者が到着するのを待っていた。そして時計は14時46分をまわった。

「うん、揺れてるか？」

不意に目眩のような感覚に襲われる。立ちくらみなどではない。

院内が騒がしくなった。

「こいつは……」

すぐに地震だと気付いた。

「これは……ちょっと……大きいぞ」

私はすぐさま院内に飛び込み、様子を伺った。地面の直接的な揺れと、建物の揺れは違う。椅子や机、パソコンのモニターに花瓶、絵画。ありとあらゆるものがそれぞれは規則的に、しかし全体としてはバラバラに揺れている。

「やばそうなのは……」

それが値打ち者であるかどうかはともかく、壁から落ちたら危険だと判断した。色鮮やかな花が描かれている大きな絵画は、壁の上を這うように踊っていた。私は壁にかかった大きな絵画を手で押さえた。

「扉開けて！外には出ないで！何かに捕まって！姿勢を低く！」

院長が冷静に大きな声で患者やスタッフに声をかける。あまりのことにみんな声が出ていなかったが、院長の声にとっさに数人のスタフが反応し、ひとりとはドアを開け、一人は花瓶を抑え、院長は待合室の患者に声をかける。

「大丈夫、大丈夫、もう少しすれば揺れは止まるから！」

しかし、院長のその言葉はむなしく裏切られた。揺れは恐ろしいほど長く続く。目の前でうずくまる70歳くらいの小柄なおばあさんに声をかける。

「大丈夫ですよ。ほら、僕の手を握ってください」

左手で絵画を押さえ、右手をおばあさんに差し出す。おばあさんは両手ですがるように私の手を弱弱しく握った。私は少し強く握り返した。

「もう、収まりますよ。大丈夫」

「長いなあ、これはそうとう大きいぞ。震源地どこだ」

みんな不安げに天井を見上げる。そこに何があるわけでもないし、この3階建ての建物が普通の家とはちがって、相当に丈夫にできていることに感謝をしていた。

「戸田部長、電車の中で足止めだな。これは……」

いろんな事が思い浮かぶ。この規模の地震であればおそらく交通機関は麻痺、通信手段も断たれる可能性が高い。そして何より、この時間、娘が――私の娘は学校が終わって塾へ行く時間だ。はたして、無事でいるだろうか……いや、無事に決まっているじゃないか！

「大丈夫、もう大丈夫です。ちょっと、テレビ、テレビつけて」

院長は患者に一通り声をかけると奥の部屋に入っていった。私室だ。みんないつせいに携帯を手に様々な手段で事態を把握しようとする。が、案の定、携帯電話は通じない。受付のインターネットに接続できるPCから情報を得る。どうやらとんでもない規模だ。震度4？そんなはずはない。これは5はあったはずだ。

「すみません。遅れました。車、ここに止めて大丈夫ですか？」

なんとも妙なタイミングで回線工事業者が現れた。この人たちだって、下手をすれば今の地震の最中、電信柱に登って作業をしているたかもしれないのだ。彼らはラッキーなのかもしれない。院長もこの地震で彼らに対して怒ることは忘れるだろう。一方で予定通りなら、とつくに作業が終わって事務所に帰っていたかもしれない私のなんと不運なことか！ 事務所から自宅までは徒歩で15分ほどのところだ。すぐに家に飛んで行けたはずである。こういう場合、たしか学校には親が迎えに行かなければならなかったのではないか？

断片的な情報が錯綜する中、私はまだ、ことの深刻さに気付いてはいなかった。自分の運の悪さを呪い、それでも地下鉄に閉じ込められている戸田部長よりはましだと、その程度にしか思っていなかったのだ。

第3話 回線工事

「こりやすごいぞ。東北だ、東北。震度6強らしいぞ」

「津波警報が出たけど、もう被害が出ているみたいだ」

「こわいわぁあ、でも良かった、ここに来ていて、わたし、ひとりじゃとてもとても……」

「そうよねえー、一人で居たら、どうしたらいいか、わからないわねー」

「でも、これじゃ家の中が大変なことになっているかもしれないわ」
「困ったわぁー。携帯繋がらない」

こんなとき、人はまず、自分が無事であることを喜び、更に深刻な事態になる可能性があったことに比べて、よかったと思う。そして、自分よりも大変な目にあっている人のことを聞けば聞くほどその理由なき安心感は更に高まる。今にして思えばとんでもないことだが、人が事態の深刻さ、それも自らの痛みを伴わない深刻さを自分の痛みとして変換して考えられるようになるには時間がかかる。それは想像力という特殊な能力が発揮されて始めてなしえることなのだ。

「はしごかけるから、しっかり抑えておけよー」

「はいー」

どんなときでも、どんなところでもやるべきことはある。遅れてきた業者は、このような状況だからこそ、ここでの仕事を早く終わらせる必要がある。しかし、やはり滑稽に見えてしまうのはいかにともしがたい。回線工事は、もつと簡単なものかと思っていたが、どうやら近くの電信柱に登り、そこから物理的に線を引かなければならないらしい。こんなときに大変だ。余震の心配だつてあるだろうに。

「いやね。車の中でもわかつたんですよ。もうとても運転できるような状態じゃなかったですよ」

工事業者は2人組み。明らかにひとりがベテランで棟梁の風情があり、もう一人はなんともいやらしい不貞の弟子といった感じをうけた。こういうときには、こういうめぐり合わせなのか……普通じゃない日には尋常じゃない事が続くものなのかもしれない。

棟梁がてきぱきと仕事をこなしていく。不貞の弟子はそれを補佐する。工事中の交通整理やはしごの固定、状況に応じて棟梁が必要な道具をワゴン車から取り出して渡す。そして後片付ける。二人の関係は傍目からも仲が言いようには見えないし、棟梁と弟子という一方的な服従を強いるものでも約すものでもない——強いて言えば店長とベテランアルバイトみたいな関係のようだ。

「ほら、わかります。あれ、点灯してるでしょ。あれね、防犯システム作動しちゃってるの」

不貞な弟子はニヤニヤと笑いながらある人家を指差した。世田谷の一軒家2階建てのしつかりとしたその家の玄関近くに黄色いライトが点滅している。想像するに家の中のもの倒れたり揺れたりしたのをセンサーが感知したのだろう。高価な花瓶やちよつとした著名な画家が書いた絵画とかが床に落ちているのかもしれない。しかし、それを少しもかわいそうだとか、気の毒だと思えないのは、私もこの男も同じようだ。

「ほらほら、こっちは瓦がすごいことになっているよ、あー、あー、ありや大変だ」

言葉とは裏腹に不貞な弟子はその家のことを本気で心配しているようには見えない。それは悪意とも違う、強いて言うならば、『いやらしさ』であろうか？ この男は回線工事をしながらいろんな住

宅を覗き見してきたのではなからうか？　それが楽しくてこの仕事をしているのではなからうか？　たしかに電柱の上から見える景色は、地上の景色と違ってはるかに赤裸々に違いがない。そんなものを見せ付けられては、人はこういうふうになんて『いやらしく』笑うようになるのだらうか？

「おい、ワイヤーとってくれ」

棟梁は少しばかりイラついているようだ。不貞な弟子との談笑は、棟梁の機嫌を損なうのかもしれない。ここは自粛したほうが懸命だ。私は繋がらないとわかっていている携帯を何度かかけてみる。その行為によってこの不毛な会話が終わることだけは期待できそうだ。

「携帯はダメでしょう！この道をいって右に曲がったところの酒屋の前に公衆電話があったから、公衆電話なら通じるかも知れませんか」

「なるほどですね。じゃ、ちょっと電話かけに行ってきます」

工事はまだまだかかりそうだ。自分の愛想笑いがいやしくなる前に、あの男から離れたいと思った私は、どうせ無駄だと思いながらも不貞な弟子の提案を受けることにした。

第4話 不通

どうやら大変なことになっているらしい。そういう思いと、とりあえず、なにかしてないと落ち着かない、そして、意味のない待ち時間を、あの場所で過ごすのが嫌で、公衆電話に電話をかけに行った。小さな交差点の角、右に酒屋が見える。その隣にタバコ屋なのかパン屋なのか、よくわからない。もしかしたら、どちらでもないかもしれない。信号機はない。サラリーマンらしき二人組みが携帯を眺めながらなにやら深刻な顔をしている。公衆電話は誰も使っていないかった。とりあえず会社にかけてみるが通じない。

「この時間、誰もいないよな」

そう思いながらも家に電話をかけてみる。繋がった。だが当たり前留守番電話に切り替わる。この時間家には誰もいない。妻は、パートに出ているし、娘は学校から塾、息子は共働きの夫婦の子供を預ってくれる児童スクールに行っていて、いずれも5時を過ぎないと帰ってこない。しかもこの規模の地震なら、児童は学校で待機。親が迎えに行かないといけないだろう。

「まず、無理だな。きつと電車もみんな止まってる」

私は家族と連絡を取るのを諦めた。その決断をした頃には、後ろに3人が公衆電話があくのを待っていた。二人は主婦、一人はさっきのサラリーマンのうちの一人だ。多分、部下のほう。

「あ、終わりました。どうぞ」

事務所に関してはほとんど心配は要らないだろう。液状化とか、そういうことはあるかもしれないが、怪我人が出るようなことはないだろう。

「こりゃあ、帰れないな。まいったなあ、世田谷ってどこなのさ」

今居る場所から、まっすぐどっちに向かえば家に近づけるのか、まったく検討もつかなかったし、何のアイデアもなかった。

「まずは、ここの厄介ごとを片付けて、それからだな」

医院の前に戻ると作業は順調に進んでいた。不貞な弟子はにやつきながら私に尋ねた。

「どうですか？つなかりました？」

「事務所はだめですね。呼び出しはしてるんですが、誰も出ない。

まあ、何もないとは思いますが。いろいろと混乱しているんでしょう。」

「

私が勤めている会社は、東京でも浦安に近い場所に事務所がある。医療系のシステムの販売といっても、ほとんどの人間が営業で、昼間は事務員が二人、技術者が一人である。およそ電話は鳴りっぱなしだろう。私のように外回りをしている営業からの電話や客からの電話が、ひっきりなしに鳴りつづけているだろう。ビジネスフォンの4回線のランプがずっと点灯している様子を想像し、少し気の毒になった。

「そちらはどうです？ 会社から連絡とかありました？」

不貞な弟子は、さらにいやらしい顔でニヤニヤしながら答える。

「所詮会社なんてね、わたしらの安全なんて、これっぽっちも考えちゃいくれませんよ。電話の一本もかかっちゃ来ません」

「なるほどね。どこも同じですか」

どうにも調子が狂う。私は本来、それほどの不平屋ではないのだが、この男と話していると、世の中全てが敵に思えてくる。不満はあるかもしれないが、不平とは思っていない。みんな平等に、蔑められている。少なくとも私の周りでは……

「もっとも、こんな調子じゃ、連絡を取ろうにも、取れないでしょ

がね。次の現場まで行けるかどうか」

確かにそうである。このあたりは踏み切りを多いようだ。場所によつては相当な回り道をしないと線路の向こう側にいけなかったりするのだろうが、そもそも道路がともに機能しないだろう。この規模の地震があつた場合、線路の点検など含めたら復旧まで相当の時間を要するに違いない。まあ、それもいい。今は、この場所、この現場から一刻も早く離れたい。

「よし、終わったぞー。はしご片付ける。中で通信確認するから準備しろ」

棟梁の言葉を聞き流しながら、すでに不貞な弟子は次の作業の準備にかかっていた。これでようやく開放される。時計は午後4時になろうとしていた。

第5話 いつものこと

「はい、では、こちらの作業は終わりましたので、あとはお宅のほうで機器の設定をお願いします」

棟梁は礼儀正しく、しかし義務的に私に作業の引継ぎを依頼した。どうやら、あまり好かれてはいないようだ。それまで利用していた通信回線は、まだ生きている。新しく引いた安価な回線は、もっとも家庭で使われているものだ。わたしの作業はその新しい回線にあわせて、古い環境のバックアップと新しい回線用の設定……とはいってもひとつの設定ファイルのコピーと、たった2行、IDとパスワードを書き換えるだけの作業である。ちよつと知識のある人間であれば、5分もかからない。その5分の作業のために、片道一時間、業者が来るまでの2時間、業者の作業が終わるまでの1時間、計4時間を費やしたのである。

「はい、こちらの設定も終わりましたので、現場のネットワークの確認をお願いします。とりあえず、WEBがみれて、メールが出来ればOKですから」

確認をするのに5分。これでようやくこの場所から離れられる。

「あ、申し訳ないけど、こっちも見てくれるかな？」

帰れると思った矢先に、院長の部屋においてあるPCになにか不具合があると頼まれる。

「あ、いいですよ。どんな感じですか？」

これは仕事じゃない。

「だが、こういうことのひとつひとつが、信頼に繋がるのだ」と専務はよく口にする。それはいい。だがその一方で、『タイム・イズ・マネー 時は金なりだ』と言っては、業績が上がらないのは業務効率が上がらないのが原因。つまり『のろまのお前らが悪いという』顔で言われるのは無性に腹が立つ。もっとも、この件では、戸田部

長を始め、ほとんどの従業員が同じ考えのようだ。そう、みんな平等に蔑まされ、何かを疎ましいと思っている。

「あ、なるほどですね。セキュリティソフトが複数ありますので、古いほうは削除なさったほうがよろしいかと思います」

ソフトが無料だから、新しいのが出たからといって、何でもほいほいインストールするのは、院長と専務は同じ人種だな。私なら絶対にそんなことは……そう思っではみても、それはそれで仕方がないことだと最近はあるようになった。そうやって世の中は回っているのだ。

「終わりました。これで変なメッセージは出ないと思いますよ」

「おー、そうか、そうか、じゃあ2階のPCも同じなんだね。ついでにそれもお願いでできるかな」

「2階ですか？」

「あー、2階のリビングにPCがあるから、ちょっと待ってて、いま内線で妻に言っておくから、そのドアを開けてすぐの階段ね」

「はい、わかりました」

まったく、いつもこうだ。

言われたとおり2階に上がると立派なゴールデンリトリバー——決して賢そうにはみえないし、だいいち私は猫派だ——が、間抜けな顔で私を迎える。そして跡に続いて、院長とはとても年齢が釣りあわない院長夫人が現れた。

まったく、いつもこうだ。

「すみません、なんか余計な事まで頼んじゃって、ご迷惑おかけします」

院長の『いかつさ』に院長夫人の『物腰の柔らかさ』と『しなや

かさ』は……

まったく、本当にいつもこうだ。

「いえいえ、おかまいなく」

そう言いながらも、私の目は部屋の隅々を物色しながら、ふだんどのような生活をしているのかを観察する。いつの頃から、そういうことが、実はとても役に立つことだと思うようになった。院長の人となりは容易に想像できた。この部屋は完全に奥さんの管理下にある。すべて家のことは奥さんに任せているのだろう。部屋の家族の写真……息子が一人いるみたいだが、大学生くらいか。この奥さんは見た目よりもかなり歳がいているのか、或いは再婚か。

「これなんですけど、わかります？わたしはぜんぜん機械のことはわからなくて……いつも息子に怒られるんです」

一台のノートパソコン。壁紙に愛犬の画像。

まったく、いつもこうだ。

「あ、大丈夫です。すぐに終わりますよ」

作業は簡単だ。まったく同じ問題だった。ものの数分で作業は終わる。それよりも問題はテレビだった。私の考えは少し甘かったようだ。思わず作業をする手がとまる。

「こ、これって、かなりやばいことになってますね」

「そうなのよ。もう怖くて怖くて、やはり原子力発電所って危ないのかしらね」

まったく、いつもこうだ。

第6話 脱出

「本日、14時46分ごろ、太平洋沖を震源とする。強い地震が観測されました。地震直後に発生した津波により、太平洋沿岸部の地域に大きな被害が出ている模様です。また、福島的第一原発においては……」

46型くらいであろうか、私からはちょうど後ろになる。ノートPCはパソコンラックに壁向きに設置してあるので、画面を見るためには思いっきり振り向かないといけない。すぐに作業を終わらせ、終わりましたと報告する体裁で後ろを振り向くと、テレビの中では信じられない光景が映し出されていた。

「千葉のほうじゃ火災が起きてるみたいよ。有毒ガスの心配があるかもしれないって」

院長夫人は、線が細く、そばに間抜けな顔をした犬がいなければ、きつと一人ではこの部屋に居られないのである。一生懸命に毛並みのいい犬の大きな背中を撫でながら、テレビを食い入るように見たい。お茶を出すのも忘れて。でもそんなことはどうでもいい。こういう言い方はおかしいかもしれないが、私ですら、テレビの画面に映し出されている事態を、にわかに信じがたいと思っているのだ。人間はある想像力を超えた事態に直面すると、感覚が麻痺するらしい。これから起きるだろう、津波による被害の拡大、火災、流通、経済の混乱、物資不足、通信途絶、身内は、友人、知人の実家は？ そんなことをいつぺんに考えたらパニックになるにちがいない。処理が追いつかない場合は人もコンピュータも同じだ。フリーズするしかない。

「きつと家の水槽、えらいことになってますね。物もいろいろ散ら

「かつてる」

「どちらからこられてんですか？」

「あ、はい、葛西、江戸川区です、浦安の隣です」

「あら、じゃあ、千葉に近いのね」

「はい、まいりましたね、これは……どうしたら帰れますかね」

「そうね、電車は全部止まっているみたいだし、バスなら渋谷へ行くバスが隣の経堂駅から出てたと思うけど、動いているかしらね」

「あ、でも、渋谷までいければ、何とかなるかもしれません。ありがとうございます、あ、一応作業は終わりましたので、ご確認ください」

ノートパソコンを再起動し、立ち上がった画面——壁紙の犬の顔は実物よりかは少し賢く見えるか——いくつかの見慣れないアプリケーションが起動したあと、例のメッセージ『ライセンスはすでに有効期限が過ぎています。ライセンスの更新の手続きをしてください。コンピュータは危険な状態です』はもう現れなくなった。

「あ、よかたわ、ありがとうね、あら、ごめんなさい、お茶も入れずに」

「いえ、お構いなく、もう帰らないと、遅くなると、この先どうなるかわかりませんから」

「そうね、じゃあ、気をつけてね」

多少のイヤミをこめたつもりだが、思ったとおり気づかなかつたらしい。あるいは気づかないふりをしているのか。

「はい、ありがとうございます。では、これで失礼します。また、なにか不具合がございましたら、こちらの連絡先までお願いします」
心から、そう思っているときもあれば、二度と来るか、と思うこともある。この日はどちらだっただろうか、あまりにもいろんなことがあったので思い出すことも出来なくなっている。

隣の駅——経堂までは歩いて15分か20分だろうか。まったく土地勘がない。医院のスタッフに聞いても、線路沿いに歩けばいいとしか、返ってこない。まあ、そこまでは問題なくいけるだろう。心配なのは本当にバスが動いているかどうかだ。非日常的な出来事の中で、それでも私は冷静さを保ち、自らの行動、判断になんら不安はなかった。こういうときは動かないのが一番だ。だが、ここはあまりにも遠すぎる。少しでも家に近づいたほうがいいだろう。まずは、選択肢を増やすことだ。ここから離れない限り、選択肢は増えないだろう。そして私は出会うことになる。

非日常的な状況の中で、非日常的な存在に……。

第1章『揺れる街』終わり 2章に続く

第7話 1983年 理由ある反抗

まずは豪徳寺駅へ行ってみることにした。そこである程度の情報が得られるはずである。経堂駅へはそこから線路沿いに歩いていけばいい。不慣れな土地だ。確実な方法をとったほうがいい。院長に挨拶をすませ、医院を後にする。帰り際の院長は最初のそれとは違い、少しばかり親近感を感じた。やはり、どんな形にせよ同じトラルブルに巻き込まれたもの同士というのは、どこことなく親しげに感じるようだ。

医院を出ると目の前に小学生の集団がぞろぞろと歩いている。頭には防災頭巾を被り、大人たちが何人か付き添っている。集団下校というやつか。いよいよそれらしくなってきた。まさに大地震だ。しばし、その列を眺める——子供たちのことが気になる。しかし、どうすることもできない。とりあえず駅に着いたら、公衆電話からもう一度電話を試みよう。しかし、心配なのはそれだけではない。無事子供たちが家に帰れたとしても、家の中がぐちゃぐちゃになっているかもしれない。

本棚に不安定に積み上げられた読みかけの本。テレビの上においてあるプラモデル。そしてなによりも玄関においてある金魚の水槽——おそらくいくつかの本は床に落ち、プラモデルは倒れて一部のパーツが折れてしまっているかもしれない。水槽の水は玄関を濡らしているだろう。さすがに棚が倒れたり、食器が落ちて割れたりはしていないだろう。

「いや、待てよ。そういえば……」

不思議なこともあるものだ。つい数日前になんとなく気になってテレビの上の2体を残して、他のプラモデルは箱に入れてしまった

のだった。いずれもアニメのロボットのプラモデルなのだが2体のうちの1体は土台があり、まず倒れることはないし、もう一体も足ががっちりしていて比較的安定感があるものだった。これが『虫の知らせ』というやつなのか？

「アッシマーとリック・ディアスなら大丈夫か。やはり玄関の水槽だな。金魚が床の上で跳ねてたりしなきゃいいが」

玄関にはキャスター付きのプラスチック製収納ケースの上に、小さいサイズの水槽があり、お祭りの金魚すくいで持ち帰ってきた金魚が6匹泳いでいる。いや、そういえば先月一匹死んで5匹になってしまったか。とりあえず、今はできることをやろう。何人かの同僚にメールを送る。

自分はこれから渋谷に向かいます。ただし、動けない可能性大。何かあったらメールで連絡を！

妻には、家に帰れない可能性が高い。場合によっては品川に行くかもしれないとメールをうった。

「一応、品川にもだしておくか」

私の両親は品川に住んでいる。渋谷までいければ品川までは山手通りをひたすら歩けばたどり着ける。実家に住んでいた頃、池袋で友人と飲んで、家に帰ろうとして寝過ごし、山手線を一周して池袋に戻ったところで電車がなくなっただけがある。タクシー乗り場はすごい人、酔った勢いでそこから歩いて五反田あたりまで行ったことがある。流石に疲れてそこからタクシーを拾ったが、それに比べれば、渋谷から歩くことなど、さほど難しいこととは思えなかった、自転車でもあれば楽に……

「自転車があれば、ここからでも楽勝だな」

豪徳寺の駅には行き場を失った人が数人、駅の公衆電話に並んでいた。まだ、その程度のレベルだった。改札の前には『本日大地震のため前線運休』と赤のマジックで模造紙に書きなぐってあった。予想通り、まったく予想通り、慌てる必要もなければ、うるたえることもない。

「歩くか。経堂まで」

駅ひとつ、とはいえ、知らない土地である。線路沿いに歩いて、そのままいけるのかどうかわからない。携帯電話でマップを確認しながら、それでも電池は貴重なのであるべく携帯の電源は節約して使わなければならない。こんなときに限って、手持ちのノートパソコンのバッテリーは頼りない量しか残っていなかった。ふと気が付くと、周りには自分と同じような境遇と思われる地元の間人ではなさそうなサラリーマン風の男女が足早に歩いている。タクシーにしろ、バスにしろ、豪徳寺では拉致が開かないと思うのは普通のことである。

線路沿いの道はたぶん、いつになく人通りが多くなっている。普段はこんな人歩いていないのだろう。途中に放置してあるのかどうかわからないような自転車は何台か置いてある。いや、捨ててあるのか？

「これに乗っていけば、何とかなるかもな……ふん！中学生じゃあるまいし」

私は吐き捨てた。経堂駅に向かって歩いている間、私は中学生の頃の自分を見つめていた。あの頃、1982年か3年か……通っていた中学では校内暴力が横行し、まじめに勉強しようという生徒は、学校に行かないか、行っても授業をサボって、静かな場所を探して受験勉強にいそしんでいた。それくらい荒れていた。どんなにまじめな生徒でも、モラルの基準は校則でもなければ先生でも親で

もない。格好の悪いことはしたくなかったし、目立つこともしたくなかった。それがもつとも大事なルールだった。しかしそれはあくまでこの場所のローカルルール。中学を卒業して、高校に進めば、まったく違う世界があることも知っていた。だからみんな我慢した。

私は不良と呼ばれる連中と学校の外で遊び、校内では、まじめに授業をサボって受験勉強をしている連中と付き合っていた。そのどちらでもない連中——学校のルールに従うことを疑わず、それによしとしている連中とは、あまり馬が合わなかった。校則を破ることは悪いことだとは、わかつている。しかし、大人たちは自分の言うことをきく生徒にだけの校則を当てはめ、耳を貸さない連中は放置していた。そんな不平等なルールに従う意味がどこにあるのだというのを口に出しては言わないが、常にそういう目で大人たちを見、ルールに従う生徒たちを見ていた。

理由ある反抗。だから私は——僕は、人様の自転車を盗んで街中を走り回っていた。

第8話 白い自転車

私は時々1982年、3年に思いをはせる。あの時期、もしかしたら人生で一番輝いていたのかもしれない。学校と自分、先生と自分、友人と自分、そして数々の悪友との背伸びをした遊びと、スポーツへの熱中、プラモデル、初めての彼女、交換日記、別れ、新しい出会い。毎日が『特別な日』だった。自転車を盗んだのは、溜まり場になっていた悪友のマンションに止めてあった白い、少しくたびれた自転車だった。鍵はいつも挿しっぱなしだった。自転車で来たときはいつもその自転車の隣に止めていたが、ある日自転車がバンクをしてしまい、修理に出すのを面倒がっていたときに、ふと、ちよつと借りるつもりでその自転車に乗ってしまった。ここへはしよつちゆう遊びに来ているし、次に来たときに、持ち主が気づけば、鍵をちゃんとかけるだろう。

自分勝手な考えだとわかっていても、世の中はもつと理不尽で自分勝手だということをなんとなく、肌で感じていた。そう感じてしまふことを他人のせいにしたまま「自分はこれくらいは許されるだろう」と世の中を甘く見たり「許されなければ、それはきつと、あつという間に警察に引き止められて、捕まってしまうだろう」と運試しを楽しんでみたりしていた。みんな好き勝手にやっている。

それなら自分はどこまで許されるのか？

世の中の仕組み、境界線を少しだけはみ出してみたい

2度ほど警察に止められたが、2回とも事なきを得た。盗難届けが出ていなかったのだろう。でも、やがてその日は訪れた。3回目に呼び止められたとき、警察無線に聞きなれない言葉が流れた。そして親が呼ばれ、私は指紋を採取された。

「フンツ！　なんで、また、こんなことを思い出すかな」

その日を境に私の人生は輝きを失った。当時付き合っていた彼女とは、彼女の信仰している宗教のことや、いくつかの心のすれ違いの末に別れ、進学した高校で、彼女が自分のよく知る友人と付き合っていると聞いたとき、私は恋愛に臆病になり、暗い高校時代をすごした。それでもきつと、クラスの誰よりも暗かったわけではないし、その頃の友人とは今でも年賀状のやり取りくらいはある。だが、結局思い出すのは、1982年と3年のことばかりだ。

「この歳で自転車なんか盗んだら、シャレにならないだろう」

ふと、気が付くと、やけに人通りのない通りを歩いているのに気が付いた。ちょうど高架線の下になるのだが、一緒に歩いていると思っていたほかの同じ境遇の路頭に迷う人たちはどこかで道を曲がったらしい、いや、自分が曲がってしまったのか。

「まったく、変なことを考えながら歩くから……」

人通りのない道に白い、少し使い古した自転車が置いてあった。鍵はかかっていない。これはなにかの嫌がらせなのか。あの時とは違う、あのときの自分とは……そう思いながらも、私は自然と自転車の方に向かって歩き始めた。それを引き寄せられるようにといえば、そうなのかもしれない。思わず手が自転車のハンドルに伸びた瞬間、自分の中である光景が思い浮かんだ。

「ゴメンね、これ、大事なものでしょう。私たちもいけなかったのよ、ちゃんと鍵をかけておけばねえ」

自転車を持ち主の所に返したとき——その持ち主は老夫婦で、ほとんど自転車に乗ることがなかったのだという。私は自転車に何の細工もせず……名前や住所を書き換えたり、消したりせずにそのまま乗り回していたのだが、キーホルダーだけはつけ換えていた。そ

れは友人からも立った地方で開催された博覧会の土産物だった。特に思いいれというものはなかったのだが、使い慣れていた分、愛着はあった。老夫婦は、そのキーホルダーを私に手渡しながら、自分たちが鍵をかけていなかったのも悪いと言ってくれたのである。その笑顔は忘れることができないものだ。自分が挑みたかった社会の境界線とこの老夫婦はまったく関係のないものだった。情けなかった。自分が情けなかった。

私は頭をかきむしり、もと来た道を少し戻ろうと振り返った。

するとそこには一人の老人がじっとこちらを見ている。いや、もしかしたら自分を見ているのではないのかもしれない。自転車の持ち主なのか？老人は一瞬、静かにうなずいたような気がした。私は軽く会釈をしそうになしたが、老人のしぐさをもう一度よく観察してみると、それはうなずいているのではなく、少し震えているようにだった。こうして私は老人に出会った。

静かなる老人に……

第9話 老人

「アアアアア……」

何か聞こえたような気がする。老人がしゃべったのか。老人はただ、静かに震えていた。『老人』というのは、ある年齢を超えたら『老人』というのではなく、生物としての目に見える衰え——皮膚や顔の皺やシミ、頭髪や眉毛の変色、髪質の劣化、口元の乾いた感じ。そして動作——瞬きの小ささゆったりとした肢体の動き、指先や口先の震えなど、そういった要素全てを判定し、半分以上を満たしていれば『老人』とみなし、この場合、そのほぼ全ての項目で、その男は『老人』であった。酷く小さい。小さいというのは『背丈が』ということではなく、骨格、着ている服、手足、靴、頭、目や鼻や口、指の太さまでも、全てのサイズが子供のように小さかった。

思い切って尋ねてみた。

「あつ、あのー、ど・う・か・しま・した・かあ？」

ゆっくりとはつきりと聞こえるように私は老人に近寄りながら声をかけた。

「アアアアア……」

老人の目は、異様に奥にくぼんでおり、色素が薄くなってしまう眉毛が、余計にそれを際立たせている。もしもこの老人の人相を質問されたら10人が10人『とても小さくて、目が奥にくぼんだ老人』と答えるだろう。

「ありがとうよ」

どうも、そういう感じに聞こえるのだが、礼をいわれるようなことなど、覚えがない。失礼だと思いながらも、私はもう一度聞き返した。老人の耳元に近づき——しかし失礼のないように近づきすぎず——少しかがみながら、さっきの言葉を更にゆっくり繰り返した。

「ど・う・か・し・ま・し・た・か・あ」

近づいてみてわかったのだが、老人の肌艶は、90歳をもし越えているというのなら、私の想像をはるかに超えて、きれいな肌をしていた。しわやシミはそれこそ、最低限しかない。肌がくすんで見えたのは、どうやら汚れているだけのようだ。それも妙な話なのだが、浮浪者には見えなかった。衣服は小さいが品のよさそうな生地、むしろこざれいといっていい。

「すまんが、駅まで、その駅まで送ってくれんか。アア」

明らかに最初に聞こえた「アアアア……」という識別がでない音声ではなく、はつきりと、ゆっくりと、しっかりとした口調で老人は私に訴えてきた。たぶん、最初に話しかけた時は、タンが絡んで、くもったのだろう。今は多少空気が抜けるような音が混じるが、はつきりと聞き取れた。

「駅ですね。駅って経堂駅、経堂ですか」

先ほどより少し早めで小さく——つまり普通に話してみる。すると老人は大きく頭を立てに振って、答えてくれた。耳はしっかりしているようだった。もう一度普通の会話の調子で話しかけてみる。

「私もこのあたりの人間じゃないんで、場所がよくわからないんですが、どの道を行けばいいか知ってますか？わかりますか？」

すると老人は両手を後ろ、腰のほうに組んでゆっくりと歩き出した。その歩幅は驚くほど小さく、駅までこのペースで行ったら、どれだけ時間がかかるのかと、私に心配をさせるほどだった。しかし、急いでも仕方がないことだ。こういう非常時、老人がひとりであるのはあまり良いことではない。駅までというのであれば、構わないだろう。どうせ、今日は長い一日になるに違いないのだから。

私は方から下げたカバンを右から左にかけなおし、老人の右側を歩いた。道の真ん中を歩こうとする老人を道路の左側に少しずつ誘導した。私の身長は170センチほどだ。いや、正確には168。

5センチ。170センチはない。その私の肩の辺りに老人の頭があった。腰が曲がっているわけでも、姿勢が悪いわけでもない。どことなくその佇まいに違和感を感じたが、対して気にはならなかった。なぜならその時は、それほど長く老人と行動をとにもすることはな
いと思っていたからである。私は最初に自らを名乗る機会と老人の
名前を聴く機会を失ってしまった。

第10話 経堂駅

老人と出会った高架下から少し来た道を戻り、車道の道なりではなく、線路脇にまっすぐ連なる細い道の入り口まで戻った。どうやら、みんなここを通っていったらしい。考え事をしながら歩くから、こんなところで道を間違える。まあ、それでこの老人の手助けができたのだから、それはそれで、悪いことではないのか。

道幅が狭いので私が老人の前にでた。老人に歩幅をあわせて私なりにゆつくりと歩く。それでも、老人がちゃんとして来るのが気になり、時々後ろを振り向く。しかし、いつ振り向いても、老人と私の距離は一致の感覚を保っている。開きすぎず、縮まりすぎず。少し意識をしてスピードを上げてみるが、やはり老人はぴつたりと私との距離を保ってついて来る。少し不気味に思いながら、そのことを深く考えはしなかった。こんな出先で幽霊に取り付かれなきゃならない理由は見当たらない。そういうものを信じないわけではないが、私に限ってはそんなものに出会うことはないと思っていた。

5分もしないうちに経堂駅らしきものが見えてきた。人ばかり――公衆電話とタクシー乗り場は結構な行列ができていた。バス停にも数人ほど並んでいる。良かった、これなら座れるか。いや、そもそもバスが来るのかどうかもわかりやしない。『さて、駅につきましたよ』と声をかけようとしたら、老人はいなかった……なんていう事が起きるかと振り向くと、そこには小さな老人が静かに歩いている。そう、そうなんことは、そう簡単に起きることじゃない。

「もうすぐ、駅に着くけど、おじいさん、ここでよかったのかな？」
大丈夫だとわかっていても、わたしの口調はゆつくりとはつきり口をあける年寄りを相手にしたしゃべり方になってしまう。もしか

したら、嫌がられるかもしれないと思いながらも、そうやってしま
うものはしかたがない。

「アアアアア……」

それは最初にこの老人から聞いた声と同じものだった。なんとい
っているのかわからない。かぎりなく『ありがとう』といている
ように聞こえるのだが、どこかちがうな気もする。私は仕方なく
わかったようなふりをして、駅の改札のところまできた。豪徳寺と
同じように改札には『全線不通』としか書いていない。

「おじいちゃん、どこまで行くのかな？今日はここから電車に乗る
のは無理みたいだけど、タクシー並ぶ？だいぶかかりそうだけど……
家族に電話をするにしても並ばないといけないし、どうしようか
な？」

もはや自問自答である。

「アアアアア……」

駅のタクシー乗り場には20人ほど人が並んでいる。しかし、先
ほどから一台もタクシーは現れない。当然だ。ここに着く前に、
誰かが拾ってしまうだろうし、大一、乗っている客の目的地までつ
けないで立ち往生してるかもしれない。道路の混雑は容易に想像で
きた。不意に私の心の中に心配の種が芽を吹きはじめた。この老人
はもしかしたらとんでもない御荷物になるかもしれない。

老人は静かに私の後をついて来る。とりあえずバス停に行って渋
谷行きのバスを確認する。バス停には主婦や学生が並んでいる。最
初見たときより人が増えている。20人くらいか、これならバスが
来てくれれば座って渋谷まではいけそうだ。

「おじいちゃん、私は渋谷まで行かなきゃならないんだけど、おじ
いちゃんはどこまで行くのかな？このバスで行けるところかな？」

老人はバス停に設置してある掲示板をしばらく眺めると。ボソリと呟いた。

「バスはもうじき来る。『アアアアア』までバスに乗って行くしかないまい」

肝心の行き先は良く聞き取れなかったが、とにかく本人が行き先を確認したのだから大丈夫だろうと、そう割り切るしかなかった。聴き直したところで、私の耳に判別できるという自信がなかった。聴きなれない土地の名前を、聴きづらい発音で聞かされても、老人に嫌な思いをさせるだけのようない気がした。

いや、面倒だと思っただからかもしれない。

5分もしないうちに渋谷行きバスがロータリーに入ってきた。タクシー乗り場から何人かバスに乗ろうと人が集まってくる。あつという間にバス停は長蛇の列になっていた。座っていただけるのだから、それを幸運だと思うことにした。まあ、老人のことも含めて、神様が抱き合わせでよこしたのだと思えばいい。

「よかったねおじいちゃん、バスが来……」

そついいながら後ろを振り向くと、老人の姿はない。

「あ、あれ、おじいちゃん」

あたりを見回しても老人の姿はなかった。後ろに並んでいる女子高生に尋ねても気付かなかったという。はたして、自分は本当に老人を連れてここまで来たのだろうか。考える間もなく、バスは停留所に止まり、中から運転手が降りてきて乗客に声をかけた。

「すいません、地震の影響で道路が大変込み合っております。終点の渋谷までどのくらい時間がかかるかわりません。今お並び頂いている方、全員は乗れないかもしれませんが、その際はご了承ください」

『非日常』という感覚が少しずつだが実感として沸いてきた。私はもう一度あたりを見回して老人の姿を捜してみたが、やはり姿はない。すぐに乗客がバスに乗り込み始めた。もう、行くしかない。今行かなければ、次はどうなるかわからない。私はしかたなく、バスに乗り込んだ。私は後ろから2番目の椅子に座ることができたが、かなりの乗客を残して、バスはすぐに満員になり、発車した。駅のロータリーから出て、一般の道路に入ったところすでに渋滞に巻き込まれた。

「これは長くなりそうだ」

私は振り返らなかった。バスに乗れなかった人の列に、もし老人の姿を見つけたとしたら、きっと気分が悪いに違いない。そんなことは無意味なことだ。私にとっても、そしてあの老人にとっても。

第11話 渋谷へ

路線バスの座席数は25前後しかない。立ち席を含めて60人から70人が定員だ。このバスには定員ぎりぎりか、少しオーバーしている状態で息苦しさを感じる。その息苦しさは、空間的な見た目の窮屈さもさることながら、誰一人として談笑をしない、エレベーターの中のような沈黙の息苦しさも含まれていた。誰も何も口にしない。ただじつと何かを堪えていた。それは不安であつたり、不満であつたり、不快であつたり、不審であつたり、ともかく、ありとあらゆる負のイメージが車内を包み込んでいた。

私はバスを正面から見て左側の後ろから2番目の通路側の座席から、その光景を眺めていた。座れたことはよかったが、当然に後ろめたさもある。それは老人のこととは無関係に、普段なら席を譲ってあげたいようなお年寄も大勢いる。しかし身動きは取れない。この席はバスの後輪が真下にあるので、わたしの大きな身体ではやや狭く、窓側に座った人が途中で降りようと思つても、どうやったらそれが可能なのか、考えるだけで憂鬱になる。隣に座っているのは大きめのレジ袋を二つ持った中年の女性だった。おそらく主婦だろう。渋谷まで行くのであればいいのだが……

眠ってしまおう。

そうは思つてみたものの隣の主婦のようにには眠れなかった。何もしていないでいるとろくなことを考えない。暇を持て余して渋谷までどのくらいかかるのかを携帯電話で調べてみる。距離にして7キロちよつと——所要時間は30分強か。窓の外の景色はあまり代わり映えない。自然視線は社内のちよつとした光景に目が行く。目の前の席には背の高い若い男性といかにもまじめそうな——それは制服

の着こなしだけでなく、彼女自身がかもし出す雰囲気というものからそう思ったのだが、女子高生が座っていた。どちらも観察の対象としては面白くなく、まったく動かない夜行性の生き物を動物園で見ているようだった。いわゆるチャライ男であったり、落ち着きなく携帯をいじり倒す女子高生であれば、好奇と軽蔑の目でその光景を眺めながら、適当なことをツイッターでつぶやいて暇をつぶすのに……眠ることのできない自分が疎ましかった。

待てよそうか！ 携帯電話で通話やメールはできなくてもツイッターなら……

タイムラインからいろんな情報を得られるかもしれない。もっともサーバーが落ちている可能性も大いに考えられたが、思いのほかあっさりどログインすることが出来た。そしてそこには信じられない情報が次から次へと流れてきていた。

J R 都内全線運休みたいよ。地下鉄も私鉄もダメみたい。

タクシーやつと捕まえたけど、すごい渋滞してる。メーターがすごい事にorz

家に帰れなくなった人、都内の各ホテルで一時受け入れしているみたいですよ

【拡散希望】 都内で帰宅できない人を受け入れている施設は次の通りです……

津波警報が出ている地域の方、早くに逃げて！

千葉の工場で火災、有毒ガスが出ているらしいから避難して！

無理に帰宅しようとしなくて！今動いても混乱するだけ！

東北地方、太平洋側は津波でかなりの数の死者が出ている模様

まるで、ハリウッド映画のトレーラーを見せられているようだった。バスの乗客の中でこのことを知っている人はどのくらいいるのだろうか？ 周りを見渡すと何人かは携帯端末を操作しているようだったが、その表情からは何もつかない知ることはいらない——みんな表情が死んでいる。経堂駅前からバスに乗り込んでかれこれ1時間は経過している。

重苦しくも心地いい沈黙——沈黙に耐えさえすれば、他人のことを気にしないで済む渋滞——が続いている。後部座席の通路を挟んで反対側の窓際に座るサラリーマン風の黒いコートをきた男がワンセグ付きの携帯で、テレビのニュースを見ているようだ。この位置からはどんな内容が細かいことはわからないが、日本地図らしき形、そしてその太平洋側の沿岸地域が真っ赤に染められているのわかった。最初は番組の中でいろんなところの中継を流しているのだと思ったが、どうやらその男がチャンネルを次から次へと回しているようだった。それでも津波警報の情報がわかったのは、どのチャンネルも同じような映像を流しているからであって、つまりは、それだけ『とんでもない事態』が起きていることを示している。

私はこの時点で葛西の自宅に帰ることを断念した。陸続きといっても荒川を渡らなければ、先には進めない。はたして、橋を渡ることができるのか？ 通行規制がかかっている可能性もある。無理に行くことはない。大丈夫、きっとみんな無事だ。それよりも品川の実家のほうが心配だ。最近足腰が弱ってきた父親も心配だが、母親

だってパニックになっているかもしれない。まだ実家を出ていない妹は、仕事先から帰ってこれないでいるかもしれない。

メールを確認するも返事は返ってきていない。こういうときは自動配信は当てにならない。メール受信の操作を行ってみるがやはり誰からもメールは来ていない。念のためもう一度妻と母にメールを送った後ツイッターを確認する。タイムライン上によく知る仲間を見つけた。どうやら彼らも地震の影響で悪戦苦闘しているようだ。高層ビルに閉じ込められたり、移動途中の電車の中で足止めを食らっていたりしている。そういうメンバーと情報交換してわかったこと。それは私の初期の予測をはるかに超える天災が、東北を、ニッポンを襲ったという事実だった。

第12話 タイムライン

携帯でウェブに接続し、定期的に情報をチェックする。ツイッターのタイムライン上に流れる内容は、いくつかに分類される。まず発信者が2種類。自らが安全な場所において、知りえる情報を適時にネットにあげている人。役に立つ情報が多い。特に関西地域からの投稿には阪神淡路大震災の経験を基にした有用なものが多かった。もうひとつは助けを求める声とそれを拡散するリツイートと呼ばれるもの。リツイートとは誰かのツイッター上のつぶやきをそのまま引用して、自分のつぶやきをフォローしてくれる人に知らせる方法である。つまり100人のフォロワーがいる人のつぶやきは100人に伝わり、さらにそれを一万人のフォロワーがいる人がリツイートすることで、ひとつの情報が加速度的に広がる。拡散するわけである。

ニュースサイトや報道機関など確実な情報ソースからの引用と現地でツイートをしている人の情報を同時に見ることで、より具体的に細かいディテールで今起きていることを知ることが出来た。救助を求める内容のリツイート、交通手段に関する質問、停電、断水などライフラインの情報、尋ね人など――それは不謹慎ながら今までに経験したことのない臨場感のあるニュースの見方だった。東北地方の被害の甚大さは、計り知れないものであり、あの時点ですべての情報を知ることが出来たとしても、まったく実感がわかなかつただろう。私の関心を引いたのはどの範囲まで広がっているかということだった。

九段会館で死傷者が出たというニュース。それと横浜でボウリング上の屋根が落ちたというニュース。この二つから自分の実家や自宅がどんな状態なのか想定を試みる。とても楽観的な状況では

ないように思えたのだが、バスの中はまるでそんなこととは無関係な世界のように沈黙を守り続けていた。一体被害はどのあたりまで広がっているのか？ 度重なる余震、津波警報は太平洋沿岸地域ほぼ全域にわたっている。津波の第一波、第二波によって北陸地方に甚大な被害が出ているようだ。さらに福島原発が大きな被害を受けているという話まであがっていた。情報が欲しい。正確な情報が遠く離れた被災地の情報ではなく、これから向かう行き先、家族の住む地域、友人・知人の安否。どんなにタイムラインが凄いい勢いで流れても、今知りたい情報は、なかなか得ることができなかった。

非常時——人はこうしてひとところにまとまっているうちは、ある程度慎重でいられるのも知れない。もしこれが、『ひとりだけ』という状況になってしまったら、落ち着いていられないだろう。だが『何も知らずに落ち着いている』という状況は、私をかえって不安にさせ、苛立たせた。ひとたび身に危険が及ぶような情報……たとえば、どこかの工場の火災が原因で有毒ガスが大量に発生したとか、原子力発電所が制御不能になったという情報がバスの車内に流れば、たちまちに不安が爆発しパニックを起こすのではないか。たとえば、このバスの運転手は無線などの通信手段をつかつてすでにそういう情報を知っていて、隠しているのではないか。私の妄想は時間が経つに連れ大きく、たくましく、不愉快なものになっていった。

バスの外に目をやれば、歩道を歩く人の表情がいちいち気になる。談笑をしながら足早に通り過ぎていく女子高生。どこか不安げにあたりを見回しながら歩くサラリーマン。携帯電話を眺めながらうろろしている若者。次々と追い越されていくおばあさんは、それでも急いでいるように見えた。道行く人の何人かはこちらの様子を伺い、気の毒そうな顔をしているように見える。そうでないとしても、そう見えてしまう。

もしかしたら渋谷駅周辺からこちらのほうへ歩いてきているのか？

土地勘のない私には、これが日常の光景なのか、そうでないのか判断ができない。何気ない風景のようであっても、人々の行動には一定の違和感を感じる。その根拠は手元の画面——タイムライン上に次から次へと流れて繰る非日常的なつづやきの数々だ。そう、このタイムラインと外の風景はリアルとヴァーチャルという関係性ではなく、地続きになっているという真実¹¹リアルな現実なのだ。

混雑したエレベータ状態のバスの車内に比べれば、ネットの世界は快適だった。あまりにも物理的な距離が近づきすぎると、人は心を開きづらくなるのだろうか。あたりを見回してもみんなそれぞれに携帯を眺め、うつむいているだけである。或いは目を瞑り、必死に何かに耐えている。誰も手を差し伸べようとしなければ声をかけようとしめない。タイムライン上ではすでにある程度のコミュニケーション——情報を共有し、それをまとめてより正確な情報、よりきめ細かい情報を届けようという動きが見え始めている。デマに対するカウンターも早い。静止した物理的空間の中で、躍動するヴァーチャルな世界に繋がっているという違和感が盛んに私のある感覚を刺激する。

それは10歳のころから私を悩まし続けているある心象風景。いや、単純に悪夢と言ったほうがわかりやすい。そして実際それは悪夢というほかない。人に話してもその恐怖は伝わらない。恐れているのは、怯えているのは私だけなのだから。

このバスはある意味安全地帯である。外で恐ろしい事が起きていたとしても、ここにいればある程度のことは防ぐことができる。しかも大勢人がいる。『外に出なければ安全だ』という状況になった

とき、人はどこまでそのことを信じられ、それを疑うことをしないように耐えられるだろうか？　ひとたび誰かが不安や疑問を口にすれば、たちまち意見はわかれ、やがて一つの方向を示す、衝撃的な事実、或いはさも、事実のようなことがその中に示される。極限状態の中での選択を迫られ、人は恐れ、怯え、競い、争い、疑い、そして何かにすがろうとする。例えそれがどんな狂気であつたとしても……

第13話 悪夢

人が人でなくなる狂気を私はごく身近な体験として知っている。いや、それは一種の疑似体験——誰もが必ずみるもの——悪夢である。代表的なものは高いところから落ちる夢や化物に追いかけられる夢だが、私の場合は、『リビング・デッド』である。あえてゾンビと表現しないのは、夢の中では設定があやふやであるからで、屍食鬼がごとき、死肉食いのシーンは夢には登場しない。『感染者』と説明したほうが適切かもしれない。

悪夢の入り口はともかく、最後はいつもこうである——『感染者』の群れに追い詰められ、どうにか身を隠す場所を見つけてそこに逃げ込む。それは廃屋の小屋であったり、学校の掃除用具のロッカーであったり、トイレだったりする。いずれも内側からしつかりと鍵が掛からない。ドアを手でしつかりと押さえなければ、簡単に外から開けられてしまう。『感染者』は私の存在に気づき、次から次へと現れ、ドアをこじ開けよとする。私は必死にドアを押さえるが、とうとう力尽きてしまいか或いは一緒にその場所に逃げ込んだ仲間が感染してしまい、ドアを開けてしまう。『感染者』の群れがなだれ込む。無数の手が私めがけて伸びてくる。冷たく青白い手。その手は私の服を引き裂き、髪の毛をむしり取る。手足をがっちり握られ身動きが取れなくなつたところに、奴らは大きな口を開けてところ構わずかぶりつく。彼らと視線が合うことはない。彼らが見つめているもの、それは私の腕であり、太ももであり、要は食料としての私の肉なのだ。私は抗うこともできず絶望の中で目を覚ますことになる。その夢をみた夜はもう眠ることもできず、夜が明けるのを震えながら待つしかなかった。

大人になってから見る回数こそ減りはしたものの、必ず年に数回

は悪夢にうなされていた。

ついさっきまで普通に行動していた人——家族や友人や同僚が『感染者』となり、私を襲ってくる——人が人でなくなる狂気を目の当たりにして、私は逃げ惑うしかない。怪物や幽霊の類に襲われて逃げ惑う夢は、多分一般的な悪夢として誰もが見るものだと思う。もちろんそういう夢も見るのだが、目が覚めてしまえばどうということはない。しかし、『感染者』に襲われる夢は根本的な恐怖の構造が違う。その違いをはつきりと自覚できるようになったのは、高校生くらいの頃か、或いは中学生くらいの頃だったか、はつきりとは思いつけないが、追いつめられる恐怖だけではなく『感染』をきっかけに、人が豹変してしまうことへの恐怖が加わる。そして、私は最後までそれに抵抗し、逃げ、そして最後に襲われてしまうという絶望感。

「そんなことにはならないさ」

自分で自分に言い聞かせる。ここは夢とは違う現実の世界。みんな『こんな状況』でもある程度の理性を保って行動することができているじゃないか——そう思う。だが、確信はない。『こんな状況』は、おそらくここにいる誰もが遭遇したことはないだろう。路線バスという狭い空間の中でこそ、そして情報が閉鎖された状況だからこそ、平静を装っていられたのかもしれない。バスが無事に渋谷駅にたどり着き、そこでそでにある程度の混乱が起きていたら……我先にと争い、バスから飛び降りて倒れるものを踏み潰して己の身の安全を確保しようとするかもしれない。そうだとすれば、あの老人と経堂駅ではくれたことはよかったのかもしれない。もし老人と行動をともししていたら……

「考えすぎさ」

だが、多分紙一重の状況ではないだろうか？ そうなったとき、自

分はどうなるのだろう。正義のヒーローなんかにはなれない。誰かに手を差し伸べるなど、できないだろう。でもあの老人を放って置けるだろうか。私がひとり妄想の中にふけっているとふと視線の中にありえないものが目に入った。

「あ、あれは、あのときの老人……いや人違いか？」

経堂駅のバス停ではぐれてしまったと思っていたあの老人が満員の路線バスの中——いわゆる優先席の近くに見えたような気がした。人と人のわずかな隙間からチラリチラリと老人らしき姿が見える。

『とても小さくて、目が奥にくぼんだ老人』

「なんてことだ！」

ただただ、渋谷に早く着くことを——いや、すでにここは渋谷なのだが、バスが人を降ろせるところまであと200メートルというところで、バスはなかなか前に進まない。私はいたたまれない気持ちになった。自分がすっかりあの老人をサポートしていれば、こんなことには……ふと老人と目が合った。老人はとても穏やかな表情で私を見つめていた。微笑むのでもなく、会釈をするわけでもなく、ただ、ただ、穏やかにそこに佇んでいたのである。その姿に私の心は大きく揺らいだ。

「バスを降りたら、あの老人に最後まで付き合おう」

私がそう心に決めたとき、バスがようやく動き出し、ほどなくして渋谷駅の停留所についた。渋谷の駅前には信じられないほどの人間で溢れかえっていた。一瞬、ドキつとしたが、その佇まいは思いのほか穏やかだった。私が想像していた『パニック』とは違う『静かなる群集』は、まるでムクドリの集団のようにざわついてはいたが、決して乱れることはなかった。

「大変お疲れ様でした。渋谷到着です。大変混雑しております。バスをお降りになりましたら、立ち止まらずにお進みください。どんな様もお忘れ物のないように、お気をつけてお帰りください」

バスの運転手は乗客に注意を促しながらも、その声には一つの仕事を成し遂げたという達成感よりも、この後もしばらく続くであろう非常事態の中での激務に対する疲労感が漂っていた。無理もない。ご苦労様でしたと声をかけたい気分だが、それができるような状況ではなかった。私は老人の姿を目で追いながら、バスを降りた。体の小さな老人は人の影に隠れてすぐに見えなくなってしまう、探し出すのが大変だったが、どうにか先に下りた老人を呼び止められる距離まで近づいた。

だが、私は一瞬躊躇した。なんと言葉をかければいいのかかわからず、言葉のないまま老人の肩に手を触れようとした。が、私はそれに失敗をした。老人と私の間を一人のサラリーマンが横切る。次の瞬間、私は老人を再び見失ってしまったのである。まわりを見回すと、そこには気分が悪くなるほどの人の頭が右へ左へと動き回っている。私は一瞬空間的な感覚を失いそうになった。

「ここに……」

ふと背後から声がする。振り向くとそこには先ほど見失ったあの老人が静かに立っていた。私は老人のおかげで自分を落ち着かす事ができたようだ。自然に言葉が口をついて出た。

「おじいちゃん。心配してたんだよ。大丈夫かい？」

老人は静かに私に微笑みかけゆっくりとうなずいた。こうして私は、再び老人と行動をとものにすることになった。時計は夜7時をとつくに回っていた。

第14話 再びバスへ

3月11日午後2時46分。私は仕事で訪れていた世田谷の豪徳寺駅周辺で、今までに経験したことのない大きな地震に遭遇した。その後も何度か大きな余震が街を揺さぶる——東日本大震災は、まだ私の目にはその一部しか見えていなかった。都内の交通機関は麻痺し、携帯電話も繋がらず、会社や家族と連絡が取れない。移動する手段を求めて隣の駅まで歩く。その途中で一人の老人と出会い行動を共にすることになった。経堂駅に着くと運良く渋谷駅に向かう路線バスに乗ることが出来た。老人も一緒に渋谷に行くはずだったのだがバスに乗り込む際に老人とはぐれてしまった。しかたがないそう思っていたのだが……いよいよ渋谷駅に着くというときに、はぐれてしまったと思っていた老人と一緒にバスに乗っていることに気づいた。バスを降り、再び老人と行動を共にすることになった。

「トイレは大丈夫ですか？まだ先は長いでしょうから、ここで用をたして行きましょう」

老人はうなづくきはしなかったが、私の申し入れを承知したという目をしたので老人を渋谷駅前の公衆トイレへ案内した。渋谷の街は思っていたほど混乱はない。お互いに知りえた情報を交換し、どうやったら目的地に着くことが出来るのかを模索している人がほとんどで、大震災という未曾有の災害が起きていることの恐れよりも、まずは家に帰ることが大事といった感じだった。携帯電話は通じない。それでも何かの間違えで通じることもあるようで、「何度もリダイヤルしたらやっと繋がった」と、通りすがりのOLが話していた。実際、渋谷に来たものの、ここで手詰まりという人は他にやることがない。都内の鉄道はすべてストップしており、JRはすでに今日中の復旧はないという案内を出していた。地下鉄が一部復旧するようだという情報をとるところで耳にする。電話が通じた人は

車で迎えに来るようにと依頼をしているようだが、それこそ混乱を招くだけだ。すでに道路は身動きが出来ない状態になりつつある。

「おじいちゃん、ここからどうする？私は両親が品川に住んでいるので、実家に世話になろうと思ってるんです。渋谷から品川までなら歩いてでも行けますから」

品川と老人の行きたい方角がまったく違うなら違うで、この際、老人に付き合うのもいいと思っていた。どのみちまとまな時間には帰れやしない。家のことは心配だったが、荒川を越えて江戸川区に入るのはいろいろと不確定要素がある。橋、通行規制、液状化現象。今のところ江戸川区周辺に大きな被害が出ているというニュースはない。千葉沖で火災が発生しているらしいがその影響があるとは思えない。有害物質が発生しているという話もあるが、流石に西葛西までは届かないだろう。しかし――

「心配かい？」

「えっ？」

「心配はいらんよ。何も心配はいらんよ」

老人は、私に心配はないと微笑みながら言った。いや、もしかしたら微笑んではいけないかもしれない。老人の顔のシワが微笑んでいるように見えるのかもしれない。だが、奥まった目のくぼみは、どこことなく不気味さも感じる。じっと見てみると、その中に吸い込まれそうな馬鹿げた錯覚に陥りそうになる。

「おじいちゃんのご家族も心配しているでしょう？連絡をとる方法があれば……あつ、公衆電話なら通じるはずです。電話番号わかりますか？」

老人は寂しそうに首を振る。さっきの笑顔とはまったく違う、寂

しそうな表情も、もしかしたら老人のシワがそう見せているだけなのかもしれない。年寄には年寄でそれなりに事情があるのだろう。私はそれ以上、老人の家族のことに触れることは、やめることにした。とはいえ、行き先を聴かないわけにもいかない。

「大森へ……」

老人は目をふせたまま静かに言った。

「ワシは大森へ行きたいんじゃない。大森はどうやってたらいけるのか……」

「大森ならＪＲで品川から二つ先の駅です。品川から歩くと結構ありますが、品川までいければ何とかなるでしょう。じゃあ一緒に品川まで行きましょうか？」

老人は静かに首を立てに振った。歩きながら、ゆっくりゆっくり何度。

公衆トイレの前は一段と混雑していた。用をたそうと並んでいる人、タバコを吸う人、それに情報を交換する人でごった返していた。「もし、トイレの必要がなかったら、ここで待っていて下さい。私はトイレをすませたら、すぐにここに帰りますから」

老人は黙って動こうとしない。私はかまわず人ごみの中を掻き分け、トイレに並ぶ列を見分け最後尾に並ぶ。私の前に並ぶ二人組みのサラリーマン——年齢は明らかに自分よりも上で、多分、社会的地位も上なのだろう——が話をしてる。どうやら渋谷から出ているバスのことを話しているようだ。私はさり気なく二人の会話に割り込んだ。

「すみません。そのバスは、どこまで行くんですか？」

「田町行きのバスが動いているらしいよ。乗り場は駅の反対側だよ」

「あ、バスターミナルですね。わかります。ありがとうございます」

「まあ、もつとも何時間かかるか、わかりやしないけどな」

「え、まあ、歩いたほうが早いとも思うのですが、なにぶん連れがいるもので」

「そうかい？まあ、あちこち歩き廻ったところで、どこも人で一杯さ。動かないのがいいのかもしれないが」

「そうなんです。じつとここで待つのもどうかと……人がどんどん増えてますからね」

「あなたがたもそのバスに？」

「いや、今その話をしていたところでね。田町に出たところで、どうにもならないって話をね」

トイレで用をすませ老人を探す。老人は言われたとおりにそこにじつと立って待っていたようだ。

「トイレ本当に大丈夫ですか？田町までいくバスがあるそうです。とりあえずそれに乗ってみましょうか？町田まで行く間に状況も少し変わるかもしれないし」

こうして私は、再び老人と一緒にバスに乗ることにした。

第15話 多くの憂鬱を乗せて

バスを待つまでの間、何度か家に電話をしようと試みたが、まったく通じる気配がなかった。メールを書く。

件名：帰れない

本文：渋谷まで来たけど、交通機関が麻痺してる。今日は品川の実家に行くから、家のことよろしく。何かあったらメールか、実家に連絡してくれ

はたしてこのメールを妻が今日中に読むかどうかはわからない。通常携帯電話のメールは、サーバーにメールが届いたことを携帯に知らせる仕組みになっている。だが今日のような非常時は、『新規メールを受信』という操作をしないと、サーバーからメールは自動的に配信されない可能性が高い。理屈がわかっていている人間にはピンとくる話だろうが、そこを妻や実家の母に求めるのは無理だろう。テレビやラジオでは、おそらく混乱と混雑を防止するため、そういう情報も流さないだろう。

バッテリーの残量を気にしながら、時々ツイッターを使って情報をチェックする。知り合いが品川方面から渋谷方面へ徒歩で帰宅しようとしている様子や会社に泊まるうとしたらビルから追い出されたという話など、随時情報が入ってくる。こういうときにデジタルデバイスがある程度使いこなせる仲間がいるのは心強い。総合的に判断して、今の状況でバスで品川方面への移動は、かなり時間がかかるだろう。しかし、老人を歩かせるわけにも行かない。行動がこういう形で制限されるのはあらかじめ想定していたことだが、やはりどこか釈然としないものがある。

老人は、静かにそこに佇み、私のそばから離れようとしなない。『この老人をひとりきりにしてはおけない』という感情が私の中に芽生え始めているのを感じるが、素直にそれを認める気にはなれないでいた。不用意に馴れ合いになるのがいやだった。

都営バスのターミナルは普段は見られないような人だかりになっていた。先行のバスが出たばかりなのだろうか。田町駅行きのバスの列は運よく20人ほどの列でまだ座れる可能性があった。まあ、こんな状況でも『誰も老人に席に譲らない』ということはないだろうと私は思った。

日本人のそういうところは、まだ、信じられる。

バスを待っている間、老人と会話を交わすことはほとんどなかった。後ろや前に並んでいる人とは、こんな場合に即した会話をした。それよりも何よりも私には寒さがこたえた。老人は決して着込んでいるという感じではないようだが、私よりは暖かそうな服装であった。

「寒くはないですか？」とたずねてもニコニコしながら首を振るだけだった。そういう自分こそ、コートを事務所においてきたことを後悔していた。

帰りが夜になるなんて、誰が想像できるものか！

渋谷駅に到着して30分が経過する。駅の周りは人で溢れ返っていた。

「本当にバスはくるんですかね」
私たちのすぐ後ろに並んだ買い物帰りといった感じの中年の女性

が話しかけてきた。

「そうですね。経堂駅から渋谷までバスで来たんですが、ものすごく渋滞してましたからね。たぶん普段の何倍もかかったと思います。どこの道路も渋滞しているでしょう」

不意に一人の老婆が駅のほうからこちらに近づいてきた。列の周りをうろつろしながら、一瞬列の間に入り込む。険悪な空気が漂う。当たり前だ。しかし、そういうことも仕方がないようにも思える。自分が座席に座って、目の前にあの老婆がいたら、やはり席は譲るだろう。しかし、それはバスに乗ってからルールである。今はバスに乗るためのルールだ。『お年寄を列の最前列へ案内しましょう』というのは、あまり日常的なフレーズではない。

「列の最後尾はあつちだよ」ひとりの中年男性が低く静かで、威圧感のある声でいう。老婆は列の後ろへは並ばずに、そのまま駅の方へと消えていった。誰にとっても後味の悪さが残る。自分の席を譲るならともかく、自分の並んでいる列の前に並ばせるわけには行かない。心があっても術がない。

そこにようやくバスが来る。

「おじいちゃん、僕から離れないでね」

私には覚悟があった。経堂から渋谷までのバスとは違い、このバスの車内では、きつと嫌な思いを何度かするだろう。今からでも列を離れて、歩いて品川方面に向かったほうがいいと思えた。しかし、この老人のことがある。

いいさ、今日は会社を出たときから、覚悟は出来ていたんだ。いいことなんかひとつもあるとは期待していなかったさ。それが少しばかり、長引くだけのことさ。それに――

それでもこの老人を無事に目的地まで送り届けることが出来たの

なら、なにかを成し遂げたという達成感、或いはもう少し崇高な何かを得られるかもしれない。

今日は、それで いいじゃないか……

バスの扉が開き、運転手が前で何かを叫んでいる。どうやら『遅れて申し訳ありません』ということと『道路が混雑しているため、田町までどのくらい時間がかかるかわかりません』という趣旨のことを繰り返し言っているようだった。

嫌な感じだ。やはり、止めたほうがいいのか。

しかし、バスに並ぶ列は進み、あつという間にバスの入り口まで来てしまった。もう引き返すことは出来ない。それに少なくとも寒さはしのげるじゃないか。そう自分を納得させ、老人を先に行かせて、バスに乗り込んだ。バスの中は乗り込んだ人が、まるで工場のベルトコンベアのように次々と座席に座っていく。ともかく人がたくさん乗るのだから、奥まで行かなくてはならない。どうにかぎりぎり、老人をバスの出口近くの座席に座らせることが出来たが、私はバスの最後尾に立つことになった。すぐに老人は人の死角に入り見えなくなってしまった。バスの外にはおよそバスに乗り込めないだろう人の列が見える。恨めしそうというよりは残念そうに見える人が多い。次のバスはいつたい、いつになったら来るのだろうか。或いは来ないことだってあるかもしれない。

多くの人を積み残して、田町行きのバスは渋谷を出発した。しかし、渋谷駅が見えなくなるまでに、何分もかかることになる。この先はもつと渋滞していることが予想される。いつたい何時間かかるのか。そしてこのバスに乗り込んだ人たちは、いつたいどれだけの忍耐力をもってこのバスに乗り込んだのか。多くの人の憂鬱を乗せ

て、バスは渋谷駅を後にした。

第16話 恵比寿駅前

バスが走り出し、携帯のバッテリーを確認する。残り少ない。こんなときに限って予備のバッテリーを持っていない。ノートパソコンもバッテリーが上がってしまった。こういう状況で情報が途絶えることは一番怖い。どうせ誰かから電話がかかってくることなどないだろう。なるべく携帯の電池を使わないようにしようと思う。それでも、やはり、周りの様子が気になる。バスの窓から見える景色は代わり映えしない。夕闇の中、長い車の列はテールランプの赤い光が怒っているように見える。バスのエンジン音で外の音は聞こえないが、それでも時々大きなクラクションの音が聞こえてくる。

東京の街はイラついている。

経堂駅から渋谷駅に向かうときに使ったバスの車内は、ほとんど会話がなかった。みんな情報が少なく、それを口にするのにまだ遠慮があった。「驚いた」「不安だ」「心配だ」「連絡がつかない」およそそのことくらいしか話すことが見つからなかった。しかし、渋谷を出発した田町行きのバスの中は少し違っていた。断片的だった情報は、自分が独自に得たものと他人から得聞いたものの、そして運よく誰かと連絡が取れた人は、そこからもたらされた情報を互いに交換し合うことで、この震災の細かいディテールが徐々にはつきりと見えてきていた。しかも渋谷駅の混乱を目の当たりにしたことで、情報との温度差を自分中、あるいは行動を共にする他の人とのすり合わせて、より具体的なイメージとしての震災を捕らえている。

人はそこから、どう行動するのか？

自らのおかれた立場と、はるか数百キロ先で起きている大惨事。

想像を超える自然の驚異と想定を超える被害の拡大。家族がいる者は家族の安否、家のあるものは被害の算段、独り身の者は、自己の安否を誰に知らせるべきか、どうやって知らせることが出来るかを模索する。

誰もがみんな 非日常な中で リアルな現実を抱えている。

「ぜんぜん進まないね」

「さつきから100メートルも進んでないんじゃない」

「どうしよう。これじゃいつになるかわからないね」

OL風の3人組が私のすぐそばで話をしている。

「そうとう被害が広がってるみたいよ」

「津波で町そのものがなくなっちゃったって！」

「日本列島が津波警報で真っ赤だよ」

ワンセグでテレビを見ながら若いサラリーマンが話をしている。そうだ、そういう話が聞きたい。こっちはできるだけ携帯の電池を節約したいんだ。もっと情報を——具体的な情報を

「あれ、地下鉄動き出したみたいよ」

「うそ！私のほうにはまだ、見通しが立たないって……」

「どの情報が正しいのかぜんぜんわかんないね」

「デマとかも、かなり流れてるらしいわよ」

「へえ、そうなの？でも、どうやって見分けるのよ」

「千葉のほうの工場の火災、有毒ガスが出てるとかいう情報が流れただけど、デマだって言ってる」

「えー、でも、工場とかヤバくない？ 有毒ガスとか普通に出そうだけど」

「だよなー」

女子大生だろうか？ さっきのOLとは明らかに違う話し方だ。いや、ちがうな。誰と話をしているかで、話の表面が変わるだけだ。あのOLは仕事上の付き合いであって、それほどプライベートでの付き合いがあるわけではないのだろう。

私たちが乗る路線バスは、地上を移動する手段としてまるで役に立たないかのように歩行者や自転車に次々と抜かされていった。それでもどうにか最初の停留所につく。しかし、バスは止まらない。この状況でバスを降りる人もいなければ、新たに人に乗せるスペースもない。並木橋、渋谷車庫前を通過する。バス停にも待っている人はいない。東二丁目、東三丁目を通過し、恵比寿駅前とアナウンスがあつたとき、不意にブザーが鳴る。

「だれだよ。空気読めよ」

OLのグループから声上がる。

「こんなところで降りるとか、意味ねーじゃん。最初から乗るなよ」
女子大生のグループもはき捨てる。

いや？これは英断だろう。こんな調子でバスに乗っていたら、かえってストレスになる。できるくらいなら私も降りたいくらいだ。あの老人がいなければ……私は老人の姿を探したが、体を思うような方向にむけることができなかった。渋谷からなら山手線で一駅、5分もあればいける場所に、なにが悲しくて1時間もかけてバスで行かなければならない。まったく馬鹿げている。いつまでこんなことを続けるのか？

私は携帯を取り出し、twitterで情報を確認する。恵比寿で降りて、日比谷線が動いていれば、別ルートで帰れないだろうか

？　しかし、すぐにその提案は却下された。渋谷に戻る以外で、ほかに方法はない。あのんだかりの駅から地下鉄が動いたとして、自分だけならまだしも老人を連れまわすことは不可能だろう。

「あ、わたし、ここでおりるね。なんか彼氏からメールが来て、車で迎えに来てくれるって言うから」

「あ、そうなんだ。よかったねー」

なんとも乾いた会話である。OLの一人は、恵比寿で降りて彼氏の車が迎えに来るのを待つというのだ。そんなことから道路が渋滞する。そう思ったのは、きっと私だけではないだろう。そう思う自分、そうわかってしまう自分がとても小賢しくてイヤだと思った。

賢くて　何が悪い。

それにしても道路はまったく機能していない。警察はいつたいなにをしているのか？　交通整理ができているとは思えないし、そういえば、ここまでパトカーの音や緊急車両の音も聞いていないし、だいたい、警官を見ていない。警察も動けないでいるのか、あるいはもつと別の場所に人員をさかなければならぬくらい、切羽詰った状況なのか？　窓の外の景色はずっと止まったままだ。私には二つの悪い考えが浮かんでいたが、あえてそれ以上考えないようにしていた。

一つはある事実。

もう一つはある妄想である。

第17話 一つの実事

「ねえ、さっきから全然動いてくれない？」

「そうだよ。10分やそこらじゃないよ。」

20分だ。いや、もう少し前かもしれない。バスは、まったく動いていない。だが、あえて私はその事実を無視していた。前の座席のほうも少し騒がしくなっている。断片的にしか聞こえてこないが、どうやらこの先の交差点で問題が起きているようだが、ここからは状況がよくわからない。

身体を少し動かしてみる。視界を確保することは出来なかったが、前方の様子を覗き見ることはどうにかできた。正面に歩道橋が見える。どうやらそこは明治通りと駒沢通りの交わる交差点のようだ。どういう理由で右折できないのか。この位置から見ることができないが『何がおきているのか』は、およそ想像はつく。信号が変わっても交差点に車を取り残され、乗用車ならまだしもバスのような大きな車両では曲がりきれないのだろう。誰かが交差点に立って交通整理をしなければ、このまま前には進むことはできない。

そう、右折車線に入ってから1メートルも進んでいない。いよいよ、バスの中は殺伐としてきた。

「なにやってんの、このバスの運転手。全然進んでないよ」

「だめだよ、あれじゃ、一生曲がれない」

「誰かなんとかしろよ」

最初は囁くような小さな声だったが、次第に『誰にも聞こえないように』というよりも『聞こえまいと遠慮をしている事がわかる程度』にかわり、やがて、周りの人に聞こえる声の大きさへと変化し

ていった。そしてついに、我慢できなくなった一人の男が大声を上げた。

「運転手さん！このままじゃ、いつまでたっても着きやしないよ！
どうにかしてよ！ 前に行って、交通整理するか、無理やり突っ込むように言わなきゃ どうにもならないよ！ 無線とか携帯で会社に連絡取れないの！」

言いたいことを言う。周りの空気が一瞬張り詰める。そして次に何が起きるかを注意深く見守っている。なんという重たい空気。なんという圧迫感。

やや、しばらくして、運転手が応える。

「そんなこと言っても、どうにもできませんよ。どこにも連絡なんか取れやしないし……この交差点さえ越えれば、もう少し道路は流れていると思うんですよ。もう少しお待ちください」

先ほど声を上げた男がすぐさま反応する。

「じゃあ、このまま待ってるわけ？ 絶対動きやしないんだから、こんなんじゃない！ どうにかしてよ！ みんな我慢してるんだよ！ 前のバスのところまで行って、なんとかしてよ！ お願いしますよ！」

運転手も語気を荒げる。

「そんなことはわかってますよ。でも、歩いてなんか行けやしませんよ。ちよっと、待っててください。なんとかしますから！」

ウインカーの音……バスが少し左に動く。どうやら車線を変更しようというらしい。それすらも骨の折れる作業である。しかし、このまま待ち続けるよりかははるかにいい。何度か信号が変わるうちにバスはひとつ左の車線——たぶん直進の車線だろう——に移動した。それにより、目の前の交差点で何が起きているのがバスの乗客にわかるようになった。これでは、大きなバスでなくても気が小

さいドライバーなら右折することなどできやしない。

アワヨクバワレサキニ

そんな言葉が頭に浮かんでくる。多分最初はここまで混乱していなかったのだろう。何台かが交差点に取り残され、それをよけるように他の車が流れを作る。その流れに乗らないと自然前に進めなくなる。それは無秩序な混乱ではなく新たなルールの構築である。その流れに乗れないものは取り残され、除外される。非常時というのは、それまでの常識が通じないだけで、秩序が完全に崩壊するわけではない。しかし、それが完全な崩壊へと発展する可能性を誰が否定でいようか。

郷に入れば郷に従え

非常時には非常時の対応が必要である。ついにバスは交差点で立ち往生しているバスの横につけた。運転手がサイドブレーキを引き、前方のドアを開ける。とたんに街の騒音がバスの中に流れ込んでくる。緊張しているのはバスの中だけではなかった。この交差点の周辺は無作為な殺気で満ちていた。

「誰も、降りないでくださいね。外にはでないで」

運転手は語気を多少強めた口調で言いながら運転席を離れると、急いでバスを降りた。運転手の帽子がフロントガラスの向こうに見える。どうやら隣のバスの運転席の横に回り、サイドの窓から、話をしているらしい。怒鳴り声のような声が時々聞こえるが、それは怒鳴らないと音が聞こえないためなのか、それとも腹の中に何か思うところがあるのかはわからない。たぶん、両方だろう。

プシュー！

折りたたみ式のドアはエアで動いている。ドアが閉められたことで、一瞬バスの中は静かになったように感じるが、ディーゼルエンジンが静かであるはずがない。運転手は、サイドブレーキを下ろし、アクセルを踏む。バスが前へ進んだ。

「おー」

乗客の中から声上がる。それは感嘆というよりは、トイレで長いこと踏ん張った後のため息のようだった。遅れて右折車線にいるバスも動き出す。私を乗せたバスは、交差点に強引に割り込み、道路をふさぐ。その間に右側にいたバスは少しずつ前に進みどうにか右折をする態勢になる。そこにかぶせるように、こちらのバスが突っ込む。信号が変わっても強引に割り込み、ついに開かずの扉をこじ開けた。

「おー」

再び乗客の中から声が漏れる。それは安堵の声。決して運転手に対する敬意を表すものではなかった。が、私は敬意を払った。この状況でマニュアルどおりの行動をとることはないのだ。非常時の時には非常時の判断と行動が必要であり、公共性の高い職につくものには、その判断も、行動も鈍りがちだ。運転手は良く判断し、よく行動したと思う。そして運転手が宣言したとおり、交差点をすぎたからは、少しずつでも前に進むようになった。やがてバスは恵比寿の駅のロータリーに入っていた。

「こんなところで降りてどうするんだ」

「乗せることないだろう。いったいなんだから」

口に出して言う者、目で訴える者、目も耳もふさぎ、無関心を装う者、無関心の者。身動きが取れない分、頭の中を動かすことしかやることがない。感覚も無駄に研ぎ澄まされ、見なくてもいいもの、聴かなくてもいいものが聞こえてくる。こんなときは音楽でも聴い

ていたほうが気がまぎれるが、携帯電話の電池の残量が気になって
それできない。

ともかく、いい。

この息苦しい状況から一人でも二人でも人が降りつというのなら、
それは歓迎すべきことだろう。そしておそらく、恵比寿で人を乗せ
ることはないだろう。しかし、そうはならなかった。降りた人数は
思いのほか多く。その分何人が乗せないわけには行かなかった。絶
望的な状況ではないが、希望を一欠けらずつ、砕いていくような作
業である。人がどこまで冷静沈着でありえるか、追い込まれていく
状況の中で、誰かに手を差し伸べることを忘れられずにいられるか
そんなことを試すためのアトラクションの乗り物に、がつちりとシ
ートベルトと安全バーで押さえつけられているような、そんなスリ
リングで非生産的な気分になっていた。

面白いじゃないか。どこまでいけるか試そうというのか？

私はバスの中で、覚悟を決めた。定員オーバーのジェットコース
ターは、恵比寿駅を出発した。恵比寿駅の停留所が見えなくなるま
でに、それから30分を要した。私は考えずにいられなかった。

もう一つの妄想を……

第18話 一つの妄想

時間の経過とともに、バスは確実に目的地に近づいている。しかし、そのことで得られる安心よりも、疲労や不安、或いは理不尽な状況に対する不満によって削られる『乗客の忍耐』の量の方が少しばかり多かった。それはほんのわずかな差分だが、蓄積は累積となり、累積は自らの認識と行動との間に少しずつ差異を生んでゆく。

雰囲気には流されてはダメだ——と、わかっているつもりでも気持ちには真逆の方向を向き、疲労した身体が人の心を低い方向へといざなう。それに抗う術を本来、誰もが持つているはずである。しかし、問題はその認識があるかどうか。自分が「危険な立場に追いやられている」と気づくかどうか、わかるかどうかだ。

私が考えなくなかった一つの妄想——それは、危機に遭遇した集団が、互いに協力し合うという精神状態から、自分、或いは自分に近い人を守るために、いがみ合い、反発し、一つの過失が怨恨を生み、それが疑心となり、嫌悪となり、過去からのマイナスに鎖をつけて、大きな狂気へと進んでゆくさまである。

もし、いま、小さいいざこざが起きるとする。それが二人のグループと3人のグループで、その中の一人がどうにも言葉が汚いヤツだとする。その男が吐き捨てた何気ない——そう、その男にとって、日常茶飯事、どうということのない一言だが「アホ」という言葉に周りにいる人間が反応をする。「馬鹿馬鹿しい」ならよかったのだが「アホらしい」と言ったが為の、些細な感情のブレである。その非友好的な視線に敏感な一人、それはどちらのグループでもいいのだが、その雰囲気にもまれて過剰な反応をする。見かねた誰かがそれを察して中を取り持とうとするも、実はその男が、実は数刻

前に小さな小言を言っていたことを誰かが覚えていて、そのことを指摘する。

彼はプライドの高い男だ。

それぞれが、ぎりぎりの忍耐でこらえているが、きっかけさえあれば、いつでも爆発しそうな状況が出来る。

「やめてよ！　お願い！　バスを止めて！　早くここから出して！　私、家に帰りたいの！　ただ、それだけなのに、どうしてこんな目にあわないといけないの！」

一人の女がヒスを起こす。彼女は悪くない。なぜならそれは、病気のだから。しかし、その一言が引き金になり、少しでも心の中の摩擦を減らそうと、何人かが大声を出す。

「ふざけるな！　我慢しているのはお前らだけじゃないんだぞ！　大声をだすんじゃない！」

「そんな言い方をしなくてもいいでしょう！　彼女　怯えてるじゃない！」

「うるせえな！　ぎゃんぎゃん、ぎゃんぎゃん、騒ぐんじゃないよ！　殺されたいのか！」

あまりのドスの利いた声に、思わず誰かがたじろぎ、体がよろけ、隣の女の足を踏みつけてしまう。

「い、痛い。やめてよもう！」

「何しやがるんだ！」

連れの男が、その男の胸倉を掴む。しかし思うように動けない。男は自分が動けるだけのスペースを確保しようと、強引に周りを押しつけようとする。

「いい加減しにしろ！　もめごとなら外でやってくれ！」

あちらこちらで小競り合いがはじまる。

「お客様、どうか落ち着いてください。車内で乱暴はやめてください」

運転手がマイクで呼びかけるが、まったく効果がない。車内が混沌とし始める。私は老人の姿を探す。おかしい、前の席にいるはずなのに……

「すみません、ちょっと、前に行かせてもらっていいですか？」

私は老人が見える位置まで移動しようとするが、思うように前に進めない。それどころか、激しい敵対心を周りから向けられる。

「面倒は困る。おとなしくしていてくれ」

一人の男が私を睨みながら、低く唸る。

「違うんだ。連れがいる。前の席に座っているはずなんだが、姿が

……」

「いいから、お前はそこから動くな。動けばただじゃ置かないぞ」

「な、なんだと、貴様、何様のつもり——」

「あんた、いい加減になさいよ。こんな状況で前になんか行けるわけないでしょう！」

近くにいたOLが、まるでセクハラをしたさえない男を見下げるような目で、私を見る。

「どうして私が、そんな口の聞き方をされないといけないのかね。だいたい、お前たちのような——」

私はその後何を言おうとしていたのか、わからない。思い出せない。たぶん、卑劣なことを言ったのだと思う。しかし、次の瞬間、私の妄想は、現実の枠を飛び越えて、自走式の狂気へと向かっていった。

ドドドドーっ！

突然、突風が吹き荒れ、バスが大きく揺れる。突風？ いや、ち

がう。それはまるで砂煙のよな細かい粒子の粒がある砂嵐のようだった。しかし、砂であれば、窓ガラスに小石が当たるような音がしそうなものであるが、そういう音は聞こえてこない。まるで細かい灰を被ったような、そんな感じだった。

「な、なんだ？何が起きている？」

「おい、大丈夫かよ、これ」

「おい、おい、なんかやばくないか」

「外が全然見えなくなっただぞ。おい、誰か！　なにか見えるヤツいるか！」

「だめだ、何か細かい粉みたいなのが窓ガラスにくっ付いていて何も見えない」

「粉？どっかの馬鹿がセメントでも撒き散らしたか」

「なあ、これって9・11みたいじゃないか。あの貿易センタービルが倒壊したときの粉塵」

「おい、って、ことはこの近くで同じような事がおきたっていうのか？」

「まさか？　そんなこと……」

「おい、誰かネットつながるやついないか？　これだけの事が起きてたら、何か情報出ているだろう？」

「ワイパーを――」

そう誰かが行ったときは、バスの運転手はワイパーを動かしていたが、全くといっていいほど無力だった。ワイパーが動くたびに灰色の粉がフロントガラスにまとわりつく、何本もの筋ができるが、そこから覗けるのは、わずか数センチ先の煙上に舞い上がった粉塵である。

「窓は絶対に開けないでください」

運転手は、落ち着いた声でマイクを使って車内に案内し、エンジンを切った。この粉塵のようなものを吸い込んだんでは、動くものも動

かなくなる。そう判断したのだろう。車内が静かになった。何が起きていたのかを知ろうとして、みんな耳を済ませる。恐ろしいほど音がない。仮にかなり広範囲にこの粉塵のようなものが巻き散らかされているとして、もしそうだとするのなら、周りの音はかなり聞きづらくなるだろう。しかし、クラクションの音一つもしないというのは、どうだろうか？

「クラクションを鳴らしてみては？」

運転手のそばにいる男が提案をした。こちらからは様子がわからない。若い男の声のようだが――

プププー……。プー……。

やはり音の返りが極端に悪い。クラクションはいつもの音の半分にも満たない大きさで、寂しく暗闇に吸い込まれていく。なんとも不気味な感じである。まるで目の前で空間が歪み、そこに音が吸い込まれてしまっているようだ。周りを注意深く目を凝らしてみても、何の変化もない。なんの反応もない。

「いったいどうなってるんだ？」

「なによこれ、私たちどうなっちゃうの」

「落ち着けよ。下手に動かないほうがいい」

「だって、これ、絶対に変よ。教えて！ 外では一体何が起きてるの？」

「おい、ネットで情報つかめた人、誰かいるか？」

「ダメだ、全然繋がらない。さっきまで電波来てたのに、圏外になってる」

「こっちもだ。もしかして、全部のキャリア、ダメなのか」

私は、自分の携帯を確認してみた。不思議なことに自分の携帯は

電波が三本立っている。しかし、私は考えた。もし、自分の携帯が使えるのであれば、他の誰かも使えるはずだ。ただでさえ、電池が少なくなっている。他に使えるやつがあるはずだと。しかし、誰一人、自分の端末が繋がると申し出るものはいなかった。いったい、なにが起きている。これは、どういうことなんだ。

私は携帯を胸のポケットにしまい、しばらく事態の推移を見守ることにした。

「どうです？ 繋がりませんか」

目の前に席に座っている学生風の女性は同じ私とキャリアの携帯を持っていた。

「だめです。圏外です」

「そうですか……おかしいですね」

私は一瞬、余計なことを言っただと思った。が、その心配はなかった。

「そうですね。みんな繋がらないなんて……」

危ない。私は思わず胸をなでおろした。今は、考える。ともかく考える。軽率な行動は命取りだ。こんなところで死ぬわけには行かない。自分だけでも――

いや、そうは行かない。あの老人のことをすっかり忘れていた。

あの老人を置き去りにするなどできない。このバスの乗客を全員見捨てても、あの老人だけは助けなければならない。

私は――私は――

自分がなぜ、そうまでしてあの老人に拘るのか。まったくわからなかった。しかし、そうしなければならぬという強迫観念にも似た強い思いが私を突き動かしていた。私は、再び、老人を探し始めた。

第19話 全部嘘だった

エレベーター——そう、知り合いが一人もない状況で、客先の大きなビルのエレベーターに乗ったときのような嫌な沈黙が続く。しかし、誰もボタンを押していない。押すことができない。だから外から誰かがボタンを押さなければ、永遠にこの状況は終わらないのだ。息苦しさ、荒唐無稽さと、そしてもう一つ。恐怖或いは狂気と隣り合わせの感覚。面白い事が起きればみな笑い始めるだろうし、恐ろしい事が起きれば、全員がパニック状態に陥る。そんな『危険な状態』に私たちは置かれていた。

私はといえば、違う意味でパニックを起こしそうになっていた。老人の姿がどこにも見当たらないのである。

「す、すいません。ちょっと、いいですか？ その席のあたりに、連れのおじいさんが——お年寄りがいるはずなんです……」

私は、思い切って——でも、小さな声——なるべく多くの人間に聞かれないように、OLのグループに声をかけた。間違いなくその向こう側に老人がいるはずだと、私は確信していたし、そのあたりは完全にこちら側から死角になっていたので、記憶においても消去法を使った論理的推測においても、まったく疑いようがなかった。

「おじいさん、ですか？ 鈴木さん、わかる？」

「えっ、ちょっと待って……このあたりには『おじいさん』って感じの方はいないようですけど」

「反対側は？ 田中さん、わかる？」

「ううん。こつちもそういう人は……お名前とかわかります？」

「あ、ああ、そうですね、いや、実はバスに乗り込むときに知り合っただけで、名前とかは……おかしいな。たしか、渋谷から乗った

時は、そのあたりに座ったものだ」と

「前のほうに移動されたとか？優先席のほうまでは、ちょっとここからは見えませんか、声をかけてみましょうか？」

「いえ、いいんです。お気遣いなく。多分、私の勘違いでしょから。すみません。ありがとうございます」

〇したちは不思議そうな目で私をみやるも、すぐに関心ことはバスの外の様子に向けられた。私の行動は、私の期待通り、何事もなかったように誰の心にも留まらない些細なこととなった。しかし、本当に得たい結果は、まるで今の状況を象徴するかのように、暗中の只中でそれを得る手立てを何も思いつかなかった。

「お、おい。大丈夫か？鼻から血が出ているぞ」

「え、うそ、やだ……のぼせたのかな……すごく気分が悪い」

バスの後部座席の先頭、ちょうどステップを一段上がったところの二人がけのシートに座る若い男女の二人組み——たぶんカップルと思えるのだが、窓側に座る女性の体調に異変が起きた。

「おい、大丈夫か？おい？」

女性の具合はどんどん悪くなっているようだ。鼻血がとまらない。目がうつろで、頬は火傷をしたかのように真っ赤にはれ上がっている。尋常じゃない。男が彼女の鼻をハンカチで押さえ、血を止めようとするが、血が止まらない。彼には見えていない。なぜ血が止まらないのか、彼には見えていない。

「なんだ？どうしたんだ。血が止まらない……助けて、誰か、誰か……」

男が他の乗客を見回す。必死の思いで助けを求める。しかし、誰一人応えようとしない。いや、応えられないのだ。あまりに凄惨な光景——そう、血は彼女のものだけではなく、彼の鼻からもおびただしい血が流れていたのだ。

キーンッ！

二人の席の回りから悲鳴が上がる。鼻から血を流した男はようやく自分の身体に起きている異常に気づくも、意識は既に朦朧として目の焦点があっていない。

「病気か」

「まさか、伝染病とか、そんなことが……」

「こ、これはテロなのか？ 細菌兵器とかじゃないのか？」

「おい、早くここから出してくれ！」

「運転手さん」

あちこちで怒号と悲鳴が聞こえる。

「おい、だめだ、運転手さんが……」

「どうしたの？」

「運転手も目や鼻から血を流して……い、意識がない」

「なんなの、なんなのよこれ、どうやってたらドアが開くのよ！」

「落ち着け、もしかしたら外のあれが、やばいかもしれないじゃないか。窓を開けるなよ」

「そんなこと言っただって、いつまでもここにいたら……みんな……みんな死んじゃうじゃない！」

私は、注意深く様子を伺っていた。窓側にいる人間はみな、気分が悪そうだ。同じような症状が出ている。これは、やはり、外の粉塵が影響しているのかもしれない。しかし、それほど多く車内に入っているわけでもないようだし、直接鼻から吸い込んだのが原因だとしたら、何人かはそれに気づくはずである。ただの粉塵ではないことはわかるが、細菌兵器とか、そんなものは、映画やテレビの世界の話だ。ここは現実だ。もっとリアルで、絶望的な状況を、私は

想像できる。

私は携帯を手に取り、タイムラインを確認した。繋がる。が、動きはない。ある時間で止まっている。ほんの5分前だ。

非常事態

原子力発電所

メルトダウン

制御不能

核融合

死の灰

「放射能汚染……そんな……まさか、ありえない。福島からの距離は……」

あまりにも目を疑うような単語の羅列に、私は思わず声に出していつてしまった。

「ど、どうしたんですか？ 放射能って…… あ、あなた、その携帯使えるじゃないですか！」

うかつだった。最後の座席に座るサラリーマン風の若い男が、私の携帯を覗き込んでいた。

「あなた、どうしてそれを黙っていたんです。これって、原発が事故で放射能が東京中にはら撒かれたってことですよ。あなたそれを知っていて、ずっと黙っていたんですか？」

「ちがう、ちがいますよ。これは、私も今見たんです。私だって、

知っていれば……」

「知っていたから、おじいさんがどうのとか、言って、あわよくば自分だけバスから降りて、安全な場所に逃げようと思ったんですね」

「そんな、私は、ただ、私は、あの老人、あの老人を、送ろうと、心配して、本当だ。信じてくれ」

私は必死で言い訳をした。いや、言い訳じゃない。本当のことだ。本当のことはずなのに、どうして、あの老人は、自分の前から姿を消したのだ。

「信じてくれたと……この状況で、誰を、何を信じろというんだ」

「待て、ちよつと待ってくれ、話せばわかる。そんなはずはないんだ。放射能だなんて、そんなはずは……」

私は信じられないほど冷静だった。どんなに激しい爆発があつたとしても、高々数分で、死の灰がこんなところまで、しかも視界をさえぎるほど降り積もるなどありえない。ありえないのだ。

「じゃあ、なぜ隠していたの？　あなた、自分だけ携帯が使えることを隠してたんでしょ！」

「ちがう！だから、それは……」

「ちがうだ？　おじさん、何調子ぶっこいているの！　ざけんじゃないわよ！」

「なんだと、なんでお前らなんか、そんな口の利かれ方をしなきゃならないんだ！」

「ほら、本音が出たよ。どうせ、私たちなんか、死んだほうがましだって思っていたんでしょ？」

「ちがう、ちがうんだ。そうじゃない」

いや、全部嘘だ。本当はそう思っていた。

私は 誰も 信じてはいない

死んでしまえば いいと思っている奴がいる

いなくなればいいと 思っている奴がいる

私は 私のまわりの ごく一部の人だけ 助かればいいと
思っている

私は そう これが 人間だ

でも でも 私は

あの 老人だけは あの 老人だけは……守らなくては！

第20話 胡蝶の夢

私は必死で探した。私の半径1メートル以内に8人以上いる。みんな私を取り囲み、罵声を浴びせる。最初の何人かの言葉は理解したが、数がありにも多すぎて私の耳からあふれ出てしまっている。聞こえすぎて、何も聞こえない。それでも私は探した。探すことを止めなかった。

あの老人はいつたいどこに……どこにいる？ いや、どこに行ってしまった？

「ちょっと、あんた人の話し聞いているの！ そんなことだから――

――

「お前みたいなヤツがいるから、世の中おかしくなるんだ」

「自分だけ助かるうなんて――」

知らない。わからない。私じゃない。それは私じゃない。私は私だ。でも、今こうして狂ったバスの中で罵声を浴びせかけられているのは、私じゃない。

私じゃない。

必死に思うこともなければ、悲壮になることもない。それよりも何よりも――老人を探さなければ！

私を激しく問い詰め、非難するOL風の女性――髪の毛を後ろで結わき、化粧も服装もおとなしめなのに爪だけは、なにか変な模様ががついている。ネイルアートとかいうやつか。付け爪というのは、着脱可能なのか――その背後にちらりとそれは見えたように見えた。

彼女の結わいた髪の毛が揺れて見えた隙間に老人が見えたような気がした。

「おい、そこをどいてくれ。私は老人を——」

「な、なにをするの！ 乱暴はやめて！」

「こ、こいつ、逃げる気か！ 一人で」

「違う、違うんだ！ 聞いてくれ！ 本当に私には連れが——老人が、老人を送らないと。老人の望むところまで——」

「いい加減なことを言っな！ 貴様はそんなこと これっぽっちも思っぢゃいない」

「そうよ。老人のことなんか考えていない」

「いなくなればいいと思っっている」

「面倒だと思っっている」

「あの場で自転車を盗めばよかったと思っっている」

「そうすればこんな目にはあわなかったと そう思っっている」

私の耳に届いていない罵声は、やがて私の心の中に違う形で進入してきた。流れ込んできた。文字と色と映像と音と温度、それに——痛みと 苦しみと 不安と 恐怖と

私は一瞬挫けそうになって、心が折れそうになって、それでも——いや、だからこそ私は前に進むことを止めなかった。止めることが出来なかった。止めるわけにはいかなかった。なぜなら——

なぜなら私は そうしなければ ならないから

もはや論理的な理由など必要なかった。いや、この世界はすでに論理は通用しない。そういう時は、そうでないもので戦うしかないのだ。抗うしかないのだ。退いてしまつては、下がつてしまつては…… 覚悟は出来ていた。あとは実行するだけだ。なにを迷うことが

ある。何を省みることがある。何を恐れることがある。私は……私は……

やるべきことをやるだけなのだ。なすべきことをなすだけなのだ。それが誤りだというのなら……こんな世界は いない。

私はこぶしを振り上げ、自分の思いをこぶしに乗せて迷うことなき一撃に行く手を阻もうとする者にぶつけた。その手ごたえは気持ちが悪いほどすかすかだった。確かな反発は感じながらも、どこもなくあやふやで薄いものだった。

「こ、これは……」

最初に私のこぶしを左のほほに受けた男は、まるで砂の城のようにもろく崩れ去る。左のひじをあごに当てられた女も砕け散る。

「この現実感のなさはいい……このいい加減さは、このでたらめさはいい！」

それでもまだ、私の行く手を阻もうとする者には立ち向かわなければならなかった。そうしなければ、最初のところへ押し戻されてしまう。いつまでたっても老人がいるところ——いや、居ると思われるところにはたどり着けない。そうわかった。わかってしまった。

私は覚悟を決めなおさなければならなかった。

「何がなんでも。そして、これが夢であろうが幻であろうが、私は——私はあの老人を」

夢とはなんじゃ 幻とはなんじゃ

すべての音が消え、すべての色が消え、すべての匂いが消えた。そして問いかける声だけがはっきりと そこにはあった。

「幻とは夢の中でみるもの。夢は……現実とは違う」

夢は現実の中で見るものじゃ 違うか？

「現実にいるから夢を見る。夢を見ているときは、現実はどうなっているかは、知らない」

夢を見ているとき、現実が夢の中にある 違うか？

「現実？ 私はいつも現実の中で生きている。私が居るところが現実だ」

夢と現実がちがうというのか では、ひとつ聞く 現実とはなんじゃ？

「現実とは――」

何かを言おうとした私の口は、目の前に現れた一匹の蝶々によってふさがれてしまった。それは青でもあるし、紫でもあった。また、赤でもありえた。大きくもあり、小さくもある。遠くのように近く、近くのように遠い。

現実のようで夢でもあり、夢のようで現実でもある 違うか？

「蝶を見ている私はいる。そして私を見ている蝶もいる」

なぜ、蝶とわかる？ なぜ、自分とわかる？

「蝶は蝶で私ではない。 私は私で――」

蝶でないと言い切れるか？

「わからない」

わからないことをわかることは難しい 違うか？

「難しい」

ならば他人もそうよ わからないことをわかることは難しい

人はわかるようにしか わからない そういうものだ

「……」

沈黙はときに 言葉よりも多くを語る 語られた言葉には色がつく

「……」

「すみません。降ります。通してください」

彼氏が迎えに来るといいう〇〇風の女性の声だ。私は静かに現実には舞い戻った。

「恵比寿駅前です。ドアを開けますので、ドアのそばから離れてください」

バスの運転手は、静かに、そして丁寧にマイクで指示を出した。しかしその声には明らかに疲労とストレスがにじみ出ていた。

「じゃや、気をつけてね」

「うん、お先に」

短い挨拶の中に複雑な思いが見え隠れする。そう感じる人もいれば、何も思わない人もいるだろう。老人はそこに、そう、それまでずっとそこにいたかのように、私がいると思ったその場所、そのシ

ートに腰をかけていた。どこからが現実で、どこからが夢なのか、そんなことはどうでもいい。老人は私のほうを振り向き、無表情に微笑みかけた。老人の顔のシワは、普通にしているとも笑っているように見える。しかし、光の加減、影のつき方によっては、恐ろしく冷たい表情にも見える。

私はそんな老人をみつめて、ほっと胸をなでおろしたい気分になった。

現実でも幻でもいい。あの老人がいるのならば、それでいい。

バスは3人ほど人が降り、同じ分だけ人を乗せたようだった。いずれにしても……時間の流れが滅茶苦茶だ。しかし、今こうして考えている自分がいるのだから、ここが現実だと思うより他に手はない。いつだってそうじゃないか。何事もなかったかのようにバスは走り出す。さっき感じた息苦しさは、いささか和らいでいるような気がする。老人を見て安心したのか、私は急に世の中の事が不安になった。この震災の被害はいつたいどれほどのものなのだろうか？

しかし、どんなに思いあぐねても、震災の現実がわかるまでには至らない。このとき私が知っている現実とは、それほど小さく、細く、浅く、狭く、そして古いものだった。想像を超える現実が実在すると知るには、まだ、時間が必要だった。

第21話 幻想からの回帰

こういうことは、はじめてではない。

私は以前にも同じような経験をしたことがある。この場合の『同じよう』とは震災を指すのではなく、胡蝶の夢、妄想か幻想か、ともかく現実と区別のつかないような、不思議な感覚のことである。

私は、すっかり憔悴しきっていた。ここまでの長い道のり、いや、距離よりも時間である。そして空間である。路線バスという限定された空間で、時間と距離を移動する。外の景色は変わっていくが、私の目の前には先ほど以来、ずっと変わらない景色が続いている。そしてきつとそれは私だけに限ったことではない。ここにいる全ての人が同じような境遇にある。

にもかかわらず、人は完全には、協調し得ない。

しかしそれは幸いなことなのかもしれない。先ほどの幻想は、ひとつのパラレルワールドのようなものだ。もしも協調性が強く働けば、そしてそれが、不安や疑心暗鬼の方向に進めば、人はそこで争わずにはいられないだろう。なぜならそれは重大な身の危険に繋がるからだ。

重大な身の危険。

それは果たして、どんなものなのか？ あれだけの地震だ。エレベータに閉じ込められたり、高層ビルに閉じ込められた人はたくさんいるだろう。或いは火災によって、煙に巻き込まれた人もいるかもしれない。それよりも何よりも震源地、そして津波の被害にあっ

た地域は、それ以上のことになっているに違いない。

しかし、それを想像することは不可能だった。

阪神淡路の時だつて、実感は何もなかった。スマトラはそれこそ対岸の火事だ。まるでハリウッド映画を観ているような無責任な感覚は本当に気持ちが悪い。そしてそんな時、決まって私の中である異変が起きる。あの津波の映像をみたとき、そして住民の恐怖体験をニュースで聞いたとき、私は夢を見た。それは大きな地震によって引き起こされた津波によって、家族がバラバラになってしまふという夢だ。私は妻の手を握り、娘の手を握る。そして息子は……息子の手を握ることはできない。私の両腕はふさがっているのだから――

声を張り上げて息子の名前を呼ぶ。叫ぶ。瓦礫をかき分け、まだ膝ほどある水面の中に手をいれて手当たり次第に引つ張り上げる。しかし、息子を見つけることもできなければ、妻や娘の姿さえ、見失ってしまう。「死」という言葉が脳裏に浮かぶのを必死でこらえ、探し回る。そして私はついに妻を見つけ、娘を見つける。どうにか見つけることができた命。しかし、息子は見つからない。その場所を捜しても見つかるわけがないとわかる。その場所には息子はいないのだと私はわかる。

生のある場所にもう、息子はいない。

そして、私は――私たちは死のある場所で息子を捜す決心をする。覚悟をする。死と向き合う。

夢から覚めても涙が止まることはなかった。それは安堵からなのか、死の余韻からなのかはわからない。夢でよかったと思う。しかし、夢ではない現実はあるのだ。きつと、そういうことがあるのだ。

あるとわかっていても、私は、私たちはそれを想像することはできない。備えることはできない。重大な身の危険は、深刻さが増せば増すほど、現実味が薄れてしまうのだ。しかし――

私は蝶になった夢を見ている私なのか 私になった夢を見ている蝶なのか？

「その答えは、どこにも ありはせんよ」

老人は静かに言った。言ったように聞こえた。薄れていく現実感。夢の中のことだと思っていた事が現実になる。現実に起きている。いま、このとき、この瞬間、あの夢の中の悲しみが、北の地に溢れているんだ。夢と現実の境い目は、巨大な地震と津波によって崩れ去り、押し返される。ありえないと思っていた事が、今こうして起きている同じ時間軸の中に、私は――このバスは、居るんだ。

答えはどこにもない？ じゃあ、どこに行けば、どこに行けばその答えに……

『死』と言う文字が私の脳裏に浮かぶ、いや、もつと違うところか。イメージの世界ではない、より現実に近い世界に『死』がある。数千という数の『死』が、夢の世界から現実の世界に溢れてきている。ここが――このバスの中が安全である保障はどこにもない。そしていまだ連絡の取れない家族も、今までの感覚で考えていられないのかもしれない。

家族と 連絡を 取らなければ

「大丈夫、心配はない……」

それは私の口からこぼれた言葉、だけど、本当にそれは私の言葉だったのか、私には知る術はなかった。

「直接がダメなら……誰かの手を借りればいい。そうか、あいつな

ら連絡がつくか」

それは私の言葉だった。しかし、過去の私ではない。私の中で何かがわかった。スイッチが切り替わる。今やるべきこと、できることをやらなければ、そうしなければ……

私は携帯の電源をいれ、twitterの画面を立ち上げた。そしてすぐに目的のものを探し出した。

「あった。これで連絡が取れる！」

それは近所に住む、かつての同じ会社勤めしていた三崎という男のアカウントだった。

『かなりヤバイことになっているようだけど、とりあえず何人かの無事を確認。携帯通じないとき、ツイッターって、便利だな』

そのつぶやきに返信をする。

『おつかれー そっちは大丈夫か？ お願いがあるんだが、うちの様子を見てきて欲しいんだ。連絡が取れていない。こっちは品川の実家に向かってしていると伝えてくれ』

3分後、返事が返ってきた。

『了解です。様子を見てくるだけでいいんですか？ とりあえず今から行つて来ます』

すぐにお礼のツイート。

『すまない。お礼はいつか、精神的なもので！』

20分後、待ち望んでいた情報がもたらされた。

『拍子抜けするくらい大丈夫でしたよ。本当にキモの座った奥さんですね。お子さんたちも無駄に元気でした。心配ないようですので、帰還します』

私は心を込めて言葉を送った。

『ありがとう。感謝する』

私はその日、はじめて心に余裕を持てた気がした。そして、考えた。このまま田町まで行くのがいいのか、それとも途中で降りたほ

うが いいのか。 何が 一番 最善の 策か という ことを――

第3章 終わり 第4章 に 続く

第22話 生きるための決断

ひとつの考えの帰結が状況を変えることがあるのだと知ったのは——いや、忘れていたなにかを思い出させてくれたというほうが適切かもしれないが、私にとってどういう意味があったのか。それはわからない。わからないがしかし、なぜそうなったのか。何によってそのことに気づかされたのか。その結論にたどり着いたかは疑う余地はない。

あの老人、もしもあの老人に出会っていなかったら……

死——それは肉体的な滅びを意味するものではなく、精神的なものより内面的で脆く、傷つきやすく、デリケートでナイーブ。しかし、ある行動原理——それは真理というべきなのはわからないが、『生』への執着に目覚めたとき、能動的で闊達、なにものにも屈しないタフさと豪胆さ、さらには内側にとどまらずにあふれ、湧き出す勇気となつて恐怖を克服する力になる。そしてそれは自分だけに向けられるものではなく、周りにいるより多くの人々へと伝播するものなのかもしれない。

人は誰しも、自分はなんなのか？ 何のためにこの世に生を受けたのか？ 自分はどこから来て、どこへ向かつていくのかを長くも短く、短くも長い人生の中で一度は問いかける。その問いは最初は外側に向けられ、やがて内面へと向かつていく。そこである程度の答えを見つけられるのかどうか——それは人それぞれだろう。

答えなどないということがわかる。

そこに帰結し、考えること、そこに固執することの無意味さを悟

り、今をどう生きるかが問題だと気づくことができれば、その後の人生は至極前向きなものになるに違いない。しかし人の心は過去からの連続した魂であると同時に、その膨大な量の経験の情報——すなわち生きるためにしてきたことのログを振り返ってばかりもいられない。そしていつしか人は忘れてしまうのだ。かつて自分が問いかけて得られなかった答え——求め続ける限り、永遠に見つかからない答えは、求めることを忘れた時点でひどく陳腐なものに変転してしまう。心は錆びたり、腐ることもあるのだ。

達観は傍観になり、無関心は人を残酷にする。そしてその痛みを忘れるために、自分の姿を映す鏡から目をそむける。自分の足音に耳をふさいでしまう。そうでなければ耐え切れないような『しがみ』や『まやかし』や『目論見』、『でたらめ』や『偏見』。それを誘惑というのなら、あまりにも魅力的で狡猾で愚鈍である。それを性さがというのは簡単だが、他人に向ける目と、自分の内面に向ける目とは、自ずと異なる基準が違ってくる。人はそれほど自分を悪人だと割り切れないし、逆に他人を善人だとも信じられない。

しかしこのような状況——後で知るところの東日本大震災のすさまじい有様の前に、人は『変わらず』にはいられないし、『変わらなければ』ならない。スイッチは入れられたのだ。あとは自分で制御するしかない。私は周りの人に声をかけた。

「すいません。品川から大森・蒲田方面に行きたいんですが、田町に行くよりもどこか途中で降りたほうが近い気がするんですが、どなたかわかりませんか？」

一瞬の沈黙の後、小柄な一人の中年女性が応えてくれた。

「そうね。私も考えてただけで、白金台あたりで降りたほうがいいかもって……」

「それなら魚藍坂ぎょらんざかがいいですよ」

サラリーマン風の若い男がスマートフォンをいじりながら、つぶ

やいた。

「あ、すいません。それ、そのスマートフォンで、そのあたりの地図みれますか？」

「あ、ちよつと待っててくださいね——ほら、こんな感じ」

私の起こした行動は、すぐさま回りに伝播した。互いに持っている情報、知識、考えを交換し合い、今一番何をすればいいのかという問題を共有した。

「すいません。自分で調べればいいのですが、あいにく携帯のバッテリーが上がりかけていて」

「それなら、ほら、これを使ってください。僕はスマホと携帯両方持ってますから、これは多分使わないで済みそうなんです」

スマートフォンを持っている男は、ポケットから携帯電話とそれに繋がっている乾電池式の携帯用バッテリーを取り出し、携帯からコードを抜いて私に差し出した。

「あ、いいんですか？ 私は助かりますが、これをお借りしても、返す手立てが……」

「いいですよ。お気遣いなく。僕が持っていても、役に立ちませんから。使ってください。そんなに電池は残ってないかもしれませんが。うまいことコンビニで乾電池が買えればいいんですけど……」

「この状況じゃ、ちよつと難しいかもしれませんね。ありがとうございます。お言葉に甘えて、お借りします」
「どうぞ」

なんとも不思議な気分だった。私の妄想の中で、彼は私に酷い罵声を浴びせながら、最後は砂のように砕け散ってしまった。しかし、彼は、こうして私に手を差し伸べてくれた。紙一重の違いなのか、或いは全く別世界の出来事なのか。私にはわからない。わからないが、そういう二面性を彼も、そして私も持っているのだということ。は否定できない気がした。いずれにしても、これで決心がついた。

「よし、魚藍坂で降りるか」

「わたしも一緒におります」

「あのー、すいません。連れが席に座っていると思うんですが、ちよつと通してもらっていいですか？」

私は無理を言つて、座席の最後尾のあたりから少し前へと移動をさせてもらった。私がいると思ひ込んでいるその場所に、当たり前のように老人の姿があつた。私は特に期待をせず、不安にも思つていなかったが、やはり、老人の姿をみたとき私の顔の表情は確かに少し緩んだ。

「おじいさん。魚藍坂というバス停で降りましょう。どうやらそのほうが近いみたいですし、歩く距離も結果的には短くなると思うのですが……」

「あ……あ……あ……」

全く持つて聞き取れなかつたが、それでも私は老人が快諾をしてくれたのだと受け取つた。こうして私たちは、バスを降りることに決めた。それはバスを乗るときよりもよりはつきりとした明白な意思としての決断であり、今日始めて私がした『生きるための決断』であつた。

第23話 坂道

相変わらず道は混んでいる。バスは思ったようには進んでいないが、これまでの状況からすれば劇的に早く進むようになった。はたしてここからは、どの道JR線の復旧はないのだから、大森蒲田方面に向けての交通機関となれば京浜急行の一択しかない。しかし、およそ京浜急行が復旧しているとは思えない。そうなるとバスやタクシーということになるが、それもこの時間では難しいだろう。時計はすでに10時を回っていた。

「次は、魚藍坂下 魚藍坂下に止まります」

バスのアナウンスが聞こえる。私が押すよりも早く他の誰かが停止ブザーを押したようだ。

「次 止ります 走行中は危険ですので バスが停車するまで 座席に座るか つり革にしっかりと捕まってください」

機械的なアナウンスは、何か突っ込みたくなるが、笑う気にも怒る気にもなれず、ただ、心の中で苦笑するしかない。それでも、そういう心の余裕が持てたことは喜ぶべきだろう。

バスの車内からめる風景。たぶんこのあたりはこんな時簡にこれほどの人通りがあるところではないのだろう。どこからかはわからないが、歩道を急ぎ足で歩くサラリーマンやOLの姿が目立つ。ときどき観光客らしき外国人……おそらくは欧米から来ている富裕層の家族連れが目に入る。とんでもない体験をして、さぞかし不安なことだろう。いくら地震に慣れている日本人でも、流石にこの規模の揺れ体験している者は少ない。だれも彼らの面倒を見る余裕はないだろうと思っているときに、ふと人影がその外国人の手段に近寄っていく。

それはおよそ日本語以外は話しそうもない中年の女性であった。なにやら一生懸命に地図らしきものを持って、その外国人観光客の家族に一生懸命に説明しているのである。バスは進み、その一団はすぐに物陰で見えなくなってしまったが、そうか。みんなそうやって助け合っているんだと思うと、急にうれしくなってしまった自分にまず、驚いた。

少し前まで、私は目の前の光景に対して懐疑的で、できるだけ他人に関わらないように心がけていた。無関心を装う——そのような態度や行為は会社勤めを始めた頃には、決して当たり前ではない非常手段的なことだったはずが、今ではすっかり身に染み付いてしまっている。こんなことでもなければ、気がつかなかっただろう。そして私と同じような感覚に襲われている人は、思いのほか多いのかもしれない。

バスの窓から見える震災に戸惑う街は、まるでサファリパークか、心象のショウウィンドウのようだ。乗客はみな、バスの外の風景を眺めながら、そこに写りこむ自分の姿を見つめて思いにふける。なぜこんなことになってしまったのかと問いかけ、ともかく早く家に帰ろうと自分を納得させるしかない。しかし、ふと、バスの外の世界と中の世界が繋がっていることを思い出す。現実 is 思いのほかりアルなのだ。

そろそろかと、窓の外を眺めているとアナウンスが流れる。

「はい、魚藍坂下到着ですー」

機械的なアナウンスではなく運転手がマイクで案内をする。やはりさっきの案内は、どこか不釣り合いである。非常時には非常時のやり方をするべきであろう。

「降りる方がいます。前方と後方の扉を開けますので、ドア付近の方は、お下がりください」

やっとバスから降りられる。それを開放感というのならそうなのかもしれない。しかし、窮屈で安全な世界から広大でどんな危険が潜むかわからない世界に飛び込むことが、どうして開放感なのかと問われれば、やはり、適切な表現ではないように思える。現にここでバスを降りる人の表情には、ある一定以上の緊張感が漂っていた。しかしそれは、受身の緊張感ではなく、例えるのなら陸上競技のスタートラインに立とうとする選手のそれに近い。日常の中の定型化した決断とは違い、自己の判断に対する責任を伴う選択をしたとき、人はそうでないときよりも潔い。

「さあ、降りましょう」

私は老人を促し、老人は素直にそれに従った。老人はブツブツと何かを言っているようなのだが、どうやらそれは、何かに対して文句を言っているのではなく、面白い本でも読んでいるときについて文章を口ずさんでしまっているような感じに見えた。ステップ台を降りるときに手を差し伸べようとして、私はその手を引っ込めた。どうやらその必要はないらしい。

どことなく見たことのあるような風景——そうだ。ここは何度か通った事がある。バスの中で地図を見せてもらったのだが、今ひとつ風景と地図が一致しない。私がまわりをきよるきよると見ていると、一緒に降りた中年の女性が声をかけてくれた。

「こつちよ。第一京浜にでるのは」

渋谷駅から田町駅に向かうバスは、渋谷から恵比寿、白金高輪駅と通過し、そこから桜田通りを直進して三田・田町方面へと向かう。我々の目的地が品川よりも横浜寄り、大森、蒲田方面であるのなら、一駅ほど戻ってしまうことになる。JRの山手線内の駅の混雑は容易に予想されるし、それであれば、ここから歩いたほうがいい。魚籃坂から伊皿子坂へ抜けて第一京浜国道——国道15号線に出るの

は、ほぼ道なりに行けばいい。地図で見た時はそう思ったのだが、やはり歩いたことのない道は不安である。

声をかけてくれた中年の女性の後をゆつくりと追いながら私は歩いた。老人の歩くペースは大体心得てきた。道すがらに何台か自動販売機を見つけたが、どれも売れ切れになっている。いや、全てが売り切れているわけではない。水やお茶、スポーツドリンクといったドリンクが売り切れていて炭酸飲料は販売している。きつとこの自動販売機もこんな感じなのだろう。

「のどか沸きませんか？ 大丈夫ですか？」

老人は相変わらず静かに佇んでいる。静かに歩き、静かに拒む。だが、私はどうしても喉が渴いたので、注意深くあたりを見回しながら歩く。どこかで水かお茶があつたら買って飲もう。そしたら、もう一度問えばいい。たぶん、きっと老人は、それでも拒むだろう。バス停は魚藍坂を少し通り過ぎた桜田通りにある。道路を行き交うタクシーは、運転手も乗客も不機嫌な顔をしている。そんなことはお構いなしに私たちは先を急ぐ。いや、ゆつくりと整然と歩いて行く。この坂を上り、そして下ったところには、一体どんな風景が待ち構えているというのだろうか？ 不安とも期待とも言えない複雑な思いを引きずりながら、私と老人は、坂道を登り始めた。

第24話 我先にと

できればバスを降りた人たちと一緒に歩きたいとも思ったが、老人のことを考えれば致し方ない。足手まといとも言えるが、それは本末が転倒だ。もし私が一人で行動していたら、たぶん、こうしてここには立っていなかっただろう。だからこそ私には、そうであることを後悔するよりも、ここに至るまでの経緯に何かの意味や価値を求める行為のほうが、はるかに建設的に思いたし、そう思わなければ、まるで自分が救われない気分だった。先行く人を見送り、私は老人とともにバス停から歩き出した。

「品川駅まで、歩いて20分か……いや、もう少しかかるか」

自分だけなら、もう少し早く歩けるし、近道を探りながら進むことも可能だ。しかし、そうでないなら、そうでない方法をとるべきだし、とるしかない。それに大きな地震の後だ。下手に細い道を行けば、思いもよらない形で足止めを食らうこともありえる。ここはやはり、多少遠回りになっても、人通りのある通りを進むべきだろう。それに——なぜだかわからないが、老人もそれを望んでいるように思えた。

魚藍坂は、人が歩くのを拒むような急な坂道ではない。とはいえ、老人が軽快に上ることができる坂でもない。歩みの遅い同伴者と会話もせずにペースをあわせて進んで行くのは、想像するよりもはるかに過酷な作業だ。しかし、不思議とそのことに腹を立てるような感情は芽生えてこなかった。むしろ、その中でどうしようもなく目に入ってくる非日常的な景色をじっくりと堪能することができるとに、少なからず興味を覚えていた。

「ここここに至っては、何を急ぐ必要があるというのか」

私はこの時点ですでに観察者として今の状況を心に留めることが
それが大事だと気づき始めていた。人がこのようなときにどのような
振る舞いをし、どのように考え、行動するのか。あのバスの中での
幻影——たぶん現実でないが、確かに私が見て、感じた世界——そ
こに通じる扉に入り込むことを警戒しながら、私は注意深く歩いた。

まるでそんな私の心の変化を汲み取るかのように、老人は街の風
景の些細な変化に足を止め、なにかブツブツとつぶやいては歩き出
すのだった。道行く人の中には、あわよくばここでタクシーが拾え
ないかと、背後から来る車に気を配りながら歩いている者もいる。
またある者は、まるで今起きていることには関心がないかのように、
密閉式のヘッドフォンを装着し、軽快に通り過ぎてゆく。ある集団
はおよそ先ほどまでは知り合いではなかったのだろう「始めまして、
私はこういうものです」「で、どちらからいらしたのですか」的な
会話をしながら痛くもない腹を探られないよう決して警戒心を解か
ない。

「なるほど、こういうことを想定して、臨時の避難所になるような
マニュアルがあるのかあ」

私の関心を引いた光景——それは区民館のような公共の施設だっ
た。トイレの貸し出しや休憩、ペットボトルの水の支給するなど、
避難所として開放している。そういう場所をいくつか通り過ぎた。
老人に「寄って行くか」と尋ねてみたが、相変わらずブツブツ言い
ながら首を縦に振ろうとしない。先を急いでいるようではないが、
留まる事を良しとしない。いや、何かの時間に追われているのか、
或いは……

そこで、私にある考えが浮かんできた。もしや、この老人は、これら
の風景を私に見せようとしてここまで付いてきたのか。いや、付い
て来たのは私のほうなのか？ もしや私は何かに憑かれたのかもし
れない。だとすればこの老人は……

「みなそれぞれに、急ぐべき理由がある。みな、それぞれに正義があるが如く、それは正しい。そのときのそれは正しい」

はつきりと、そう聞き取れたわけではないが、およそ、そういうことを老人が言ったように聞こえた。老人はまた、すたすたと歩き出す。私は慌てて老人の後を追う。肩からかけていたカバンが妙に重たく感じる。流石に疲れたのか。そうであつたとしても不思議はない。かれこれ8時間近く、非日常的な常態の中にあるのだ。

ましてや――

もう、老人のことを考えるのはよそう。そのこと事態は意味がない。私がいま、とるべき道は一つだけ。一刻も早く品川の実家に帰ること。それだけだったはずである。老人がここでいいと言うところまで送っていけば済む。余計な詮索はするだけ無駄だ。どうせ、答えなどないのだから。

それを達観といえ、そうなのかもしれない。普段見落としていた街の風景、そこに溶け込まないイレギュラーな人の営みに自然関心ことは移ってゆく。だいたい「避難所」などという文字が、街のいたるところでみられるこの異常さをどう受け止めればいいのか。売り切れのランプが赤く光る自動販売機。途切れない車の列。繋がらない携帯電話。その一方で湯水のように溢れる twitter のタイムライン。普段の当たり前が通用しない非日常な状態でありながら、この街の静けさは、それこそが私の抱く違和感の源なのかもしれない。

混沌のバスの中は、みんな同じように不安になり、同じように疑心暗鬼になり、同じように気を使いあいながらも、「あわよくば我先に」と、他人を出し抜くことなどまったく意に介さないといった

覚悟を心に秘めていた。そしてそれは、不条理な中にも同じ条件という公正な緊張のバランスがとれた状況にあったともいえる。しかし一旦こうして外の世界——流動的な状況にありながらも沈殿し、一見膠着したかのような一見して時間が静止しているかのように見える世界に出てみると、まだ、バスの中の方が危険が危なくない状態のように思える。

目に見える不透明さ、耳に聞こえる不安さ、肌に感じる不快さは、車両のガラス一枚を隔てた別の世界のこと、問題は常にバスの中にあった。しかし、そのバスをいったん降りると、いかに自分たちがあの密集した憂鬱の中で身近な不安にだけ気をつけるだけでよかったかという有利さが身にしみてわかる。しかし、それでもやはりバスの中の世界と外の世界、どちらがより、生きているかといえればバスの外にこそ『それはある』と私が思えるのは、きっと「死」より「生」を「今の私」が現実的に捕らえることが出来るからではないだろうか？

だからなのだ。だから自然に他人の「生」をいたわることも出来れば手を差し伸べることも出来る。私は理屈と直感の間の齟齬をなるべく埋めようと必死に考えをめぐらす。人はもつと他人の「死」或いは「生」に対して自分勝手に無関心でいられるはずなのに、なぜ、そうしないのか。なぜ、そうできないのか。

そうか。みな不安なんだ。不安だから、やさしくなれるのか。

その結論は間違えのようにも思えるが、少なくとも私がこの老人を無事にしかるべき場所に送り届けた後に家に帰るまでの道のりを、迷うことなく歩くことができれば、今は、それで、いいのだ。

老人との会話が成立しない以上、私は物思いにふけるしかなかった

た。物思いにふけるには、思いに止まる風景が必要だった。普段であれば、それはそれで困難な作業であるのだろうが、今日という日に限っては、見るものすべてが脳裏に焼きつくし、聞くものすべてが耳に残ったし、肌を感じるものすべてに痛みがあった。

ふと気がつけば、なだらかな下り坂に差し掛かり、目の前に国道15号線＝第一京浜国道が目に入る。100メートルくらい先に、先ほどバスと一緒に降りた中年女性が見えたと思ったが、すぐに見失ってしまった。その女性は人並みにのまれ、消えてしまった。人並み——そう、そこには私がかつて見たことのないようなような光景が広がっていた。思わず私は声に出して履き捨てた。

「まるで映画じゃないか！」

第25話 滑稽な行進

目の前を人の波が左から右、つまり第一京浜を東京方面から品川川崎方面へ流れている。それはまるで大きな川が流れているようなそんな印象を与える。この道は普段、車の通りは盛んであっても決して人通りが激しい場所ではない。昼時ならまだしも夜中になろうかというこの時間には、ものけの空になったビルとビルに囲まれ、さながらゴーストタウン的な雰囲気をかもし出すような場所である。

「どこかで見たよな風景だな」

それは、最近テレビで見た映画のワンシーンのようだった。あの映画は……そう、S・スピルバーグ監督の『宇宙戦争』だ。最初宇宙人の襲撃に、何が起きたのかわからず、ただただ逃げ惑う人々。どこが安全なのか、どこに逃げればいいのか。人はただただ列を成し、その場を離れるしかほかにない。目の前の光景は、まさにそんな様相を呈していた。私はある程度の覚悟という段階から、ひとつ警戒レベルを上げることにした。群衆の中にあつて、ひとたび混乱が起きれば何が起きるわからない。だが、列に近づくにつれて、その警戒心は自然解けていった。なぜならそこには、混乱と狂騒はなく、むしろ理路整然とし、普段の秩序ある行動を黙々とこなす人々の姿があつたからである。

私はどこか興奮するような、或いは感動するような妙な気持ちになり、高揚した。日本も捨てたものじゃない。いや、日本だからこそ、日本人だからこそなのかとそう思わずにいられなかった。人の列が川の流れのように見えたのは、車道を一車線つぶして歩道にしてあり、歩行者の通るスペースを確保している。なるほどこれなら、混乱も少ないのだろう。姿が見えなかった警察は、こういう作業に追われていたのか。しっかりとしたマニュアルの対応なのかどうか。

近くで避難所の案内をしている声が聞こえる。最初警察か何かと
思っていたが、すぐにそうではないとわかった。

「トイレをご自由にお使いください。水も用意してあります」

それは、大手企業のビルの前。従業員らしき男性——およそそれ
なりの役職についているように見える——が、たぶん会社の制服で
あるう企業名の入ったジャンパーを羽織り、大声を張り上げている。
よく見ると4〜5人の同じ制服を来た男性が、同じようにビルの周
りで声を張り上げている。なるほど民間レベルでも、こういう事態
に備えてなすべきことというのはあるようだ。或いは各市町村でそ
ういう取り決めごとがあるのかはわからないが、そういう光景を目
の当たりにすると、不思議と勇気をもらったような気がしたのは、
およそ私だけではないのだろうと信じたい。

家路へ急ぐ行進の列に加わり、一番ペースがゆっくりな流れに身
をおいた。よくもここまで整然としていられるものだ。外国のメデ
イアはきつと、そう伝えるに違いない。ほかの国であれば暴徒化し
てもおかしくないだろうに。少し先にちよつとした人ばかりができ
ている。それがすぐにコンビニエンスストアだとわかった。どうや
ら飲み物が買えるようだ。ここはともかく店に寄ろう。老人にコン
ビニによるけど何か欲しいものはあるかとたずねたが、相変わらず
まともな返事は返ってこなかった。ただ、この言葉だけははつきり
と聞き取れた。

「欲しいのなら、欲しいものだけ。必要な必要なだけ。わしは何
もいらん」

入り口に老人を残して店内に入ると、そこはいつものコンビニと
はまったく違う雰囲気だった。商品陳列用の棚には、商品がまばら
にしか残っていない。それでも飲み物だけは、バックヤードから次
から次へと補充されている。余計なものを見ている暇はなさそうだ。

私は缶コーヒーかビールかを迷い、結局、ペットボトルのお茶にした。おにぎりや菓子パンが買えればいいと思ったが、それは断念し、乾電池のおいてあるコーナーも見したが、やはりすべて売り切れていた。レジに並ぶ間、店内の異様な状態とおよそ経験したことのないような状況で働き続けるコンビニの店員に少なからず同情した。が、思いのほか店員は元気に声を張り上げ、また、訪れる客を勇気付けるよな大きく明るい声で挨拶をする。

なんて気持ちのいい光景だ。

店の前で待っている老人にペットボトルを差し出し、飲むかとジェスチャーでたずねたが、無言で断られた。老人が先に歩きだし、私がそれについてゆく格好になった。気のせいかな老人の体が、最初にあつたときよりも少し小さくなって見えた。前を行く人との対比が余計にそう思わせているのかも考えたが、そういうこともあつてもいいかという目で私は老人の小さな背中を眺めながら、一口、二口と先ほど買ったお茶を口の中に流し込み、のどの渴きを潤した。目の前に連なる行列、そして振り返ればやはり、そこに行列ができている。列に加わるもの、列から離れるもの。全体としては人数が増えているのか減っているのかは判断がつかない。車道の反対側も同じよな人の列ができている。

なんとも滑稽な……

たぶん、およそ、この行進に参加しているほとんどの人がそう思っていたに違いない。同時に同じような行動をしている人がいるという安心感。普段そういつたことに苛立ちと不快感を感じるような者でも、さすがにこのような状況では、その感覚に甘えるしかほかにないように思えた。しばらく黙々と歩くとようやくマイルストーンとも言える駅——JR品川駅が見えてきた。ここまでくれば、あ

と少し、あと少しで実家に帰ることができる。自然足は先を急ごうと早くなるのだった。老人もまた、少しペースが上がる。案外と早く歩けるものだなぁと関心をしたが、声をかけることはしなかった。してもたぶん、無駄のように思えて仕方がなかった。

それにしても——いったいこの滑稽な風景この行進はどこまで続くのだろうか？ どこへ向かっているのだろうか？

第26話 静止する街

品川駅に立ち寄り、交通機関の復旧状況を確認することも考えたが、遠目からもそれは無駄なことであるとわかるほど、駅前には沈黙していた。もしこの行進に参加していなければ——それは決して望んで列に加わったわけではないが——それでも駅に立ち寄り、何かしらの情報を得ることを試みたのかもしれない。不安を解消するのであれば、それは当然の行動のように思うが、今の私には——私と私の前を歩く老人には必要が無かった。不思議であり、おかしくもあるのだが、この行進の列から離れることにむしろ不安を覚えているのかもしれない。しかし、私は一つの決断をしていた。

先に進むなら、旧街道を歩こう。

国道15号線通称第一京浜は、旧東海道でもあるが、品川を過ぎたあたり——私鉄京浜急行の北品川駅手前で旧国道とわかれる。そこは昔ながらの商店街になっており、人が歩くのであればこちらのほうが静かでいい。それにそこは私が幼少期から社会人になるまでの間——いわゆる青春時代を過ごした土地でもある。先の道のりを考えれば飲み物や食べ物調達するにも、圧倒的にこちらのほうがいいと思った。

「おじいさん、もう少し先に行ったら、向こう側に渡りましょう。旧国道の方が歩きやすいと思うんです」

私は前を歩く老人を追い越すような勢いで前に出て、すぐ横で老人に話しかけた。老人はこちらを見ることもせず、ただ静かに2回ほどうなずき、そしてこうつぶやいた。

「もうすぐじゃ。すぐそこじゃ」

私は一瞬反論しようかと思った。ここから先、老人が行きたいと

言った大森周辺までは、ＪＲ京浜東北線で二駅ある。歩くとなれば５～６キロの距離だ。バスを降りた地点からの距離ならまだ半分もきていない。タクシーを拾うなりすれば、さほど時間はかからないのだが、それはまず無理だろう。私がそのことを伝えなければ思っている矢先、目の前に信じられない光景が現れた。

国道を反対側に渡ることが出来る八ツ山橋の信号に差し掛かったあたり、品川から横浜・横須賀・三浦半島へとつながる京浜急行が道路をふさぐように停車しているのである。その異様な光景は、今起きている事態の深刻さをより一層印象付けるものであったと同時に、今夜中の復旧など望むべくもないことを知らしめていた。

「なんてことだ。こんなことが……」

暗闇の中、青白い街燈に照らし出された車両は、まるで生命を感じさせないような鉄の塊であった。普段であれば大勢の人々を乗せ、駅から駅へと有機的に社会をつなぐそれは、理屈では無機質な工業装置でしかない。しかし、私たちは日常的にそれに触れることでどこか愛着を感じたり、擬人化したり、ペットのようにかわいがったりして慣れ親しむ。車庫に格納されている電車を見れば眠っているように感じて思わずお疲れ様と言いたくなる。しかし、行く手を阻む走る赤い車両は、まるで廃墟の町に取り残された残骸のように無機質で、どこか人を寄せ付けけないような孤高な存在と化していた。

信号が変わり、国道を横断して車両のすぐそばまで寄ってみる。

しばし赤い鉄の塊を見上げ、そしてため息をつく。

「これじゃ、大森までは歩いていくしかありませんね」

老人は何も語らない。踏み切りは降りたまま機能せず、時間が止まったというような情緒ある表現よりは、都市の機能が停止した象徴的光景といったほうが適しているように思えた。車両が塞いでいるのは旧東海道入り口の一つ手前。この通りの先には路線バスの車

庫があるはずである。影響も大きいだろう。しかし幸い私が先を進むのには支障はなかった。ともかく、それだけでも儲け物と思いたくなるような状況だ。

「さあ、急ぎましようか。なんとか今日中にお宅まで送ればいいのですが……」

携帯を開き、時計を見る。すでに11時を回っていた。ふと振り返ると私が今まで加わっていた行進は相変わらず続いている。そこに戻ることもできるが、そうしたいとは思わなかった。もう私には、あの行進に加わる理由が見当たらない。

京浜急行をあとに、少し進むと旧東海道の入り口に差し掛かる。

国道沿いの行進が理路整然としていたのに対して、旧国道のそれはより普段の生活に近い自然な無秩序さがあるように見えた。私は少しだけ安堵した。

「国道をまっすぐ行くよりも、ほら、こっちのほうが静かでいいでしょう」

老人の方を振り向き、私は進むべき道を指差した。老人は静かに佇み、静かにうなずき、静かに微笑み、そして静かに口を開く。

「何も心配はいらん。もう大丈夫じゃ」

そのあと、もう一度同じ言葉を繰り返したのかもしれないし、違うことを言ったのかもしれないが、私の耳で聞き取ることはできなかった。昼間はにぎやかな商店街も、この時間ではどの店もシャッターを下ろしている。いや、にぎやかだというのは思い込みか。最初からシャッターは下ろされたままなのかもしれない。当たり前前の静けさが当たり前前と思えず、すべてが変わってしまったように思えるのは、この数時間で自分の価値観に大きな変化があったからなのだろうか。あるいはそういう気分になっているだけなのか。

1メートル以内に必ず他人がいるような窮屈な状況から、ようやく少しだけ自分の呼吸するスペースが与えられた。開放感——何もこの場所が、自分の慣れ親しんだ場所だからというわけではなく、誰かを気にしたり、誰かに気にされたりするような位置関係にいないことを長時間強いられてきたことからの開放感であることは間違いない。間違いないと思いつつも、やはり、見知った場所というのは、それだけで不必要に安心感を与えるものらしい。私は特にそういうことを意識をしたわけではないが、静かに後を着いてくる老人に自分の身の上話をしたくなり、そしてそれを我慢しなければならぬ理由を自分の中にも老人にも見つける事ができなかった。

「おじいさん、私は実はこのあたりで育ったんです。私が生まれたのは——」

他人に身の上話をしたことなど、結婚してからこの方あまり記憶になかった。そんな気になったのは、一体全体どういうわけなのか？ それはきつと話し終わった時に答えがわかるようなそんな気がしてならなかった。

第27話 私とボクと老人と

品川の実家を出たのは27か28のとき。その数年後に結婚し、子供を二人授かった。何かの理由をつけて孫の顔を見に来る両親も、最近では父の足の具合が悪く家からあまり外に出ていないようだ。私も子供の成長と共に親の都合だけで実家にはいけなくなっていたから、ここ数年は何回か――夏休みと正月くらいしか品川の実家には帰っていない。しかし、思えば家族を置いて品川に一人で帰るのは何年ぶりだろうか。そう思うと急に懐かしさがこみ上げてくる。

旧東海道は、北品川、新馬場、青物横丁と京浜急行線に平行して立ち並ぶ昔ながらの商店街になっており、今でも昭和やそれ以前の面影を残す建物や史跡が観光としても人気のスポットになっている。私にとっては少年時代にはいたずらの思い出、中学生の時には喧嘩や恋愛、高校生の時には早く抜け出したいふるい町。そして今は懐かしい町であり、私の記憶の一部である。そう、これは私の記憶の一部なのだ。だからなのか。私は無性に誰かに昔話をしたくて仕方がなくなった。そしてその話を聞いてくれるのはあの老人――静かなる老人しかないのだ。

「私の両親は函館出身で、私が3歳のときに上京したんです。品川に落ち着いたのは5歳の頃で、以来20年くらいこの街に住んでいました。あー、そう、私、自己紹介してなかったですね。川島といいます。」

老人が名乗るだけの十分な間をあけて私は更に話し続けた。老人が自ら名乗ることはないとわかっていても、そういうことは、身に付いた私の会話のリズムである。

「函館は確かに生まれ故郷なんです、それほど思い出があるわけ

ではありません。それに比べてこの町は20年も住んでいましたから、やはり特別な場所なんでしょうね。こうして歩いていると、いろんなことを思い出します。知ってますか？ このあたりは結構古い神社とかあって、お祭りも結構盛大なんですよ。でも、私は神輿を担いだり、そういうかかわり方はできなかったんです。そういうのって、最初が肝心で、そこにすぐに溶け込めなかったんですね」

老人が会話に入り込む間を十分に取りながら、そして老人がどんな話に関心があるのかを探りながら話をしていたが、だんだん、そういうことはどうでもよくなり、私は無邪気にべらべらと話を続けた。

「悪いこともしました。小学生の頃は、3年生か4年生の頃だと思います。老夫婦がやっている駄菓子屋が……えーっと、ここをもう少し先に行ったところを右に曲がって、えーっと、確かレコード屋があつて、本屋があつて、その2軒か3軒隣だったかな。もう、その店は今はもうないんですけどね。で、そこで友だち数人と万引きをしようってことになって、私は一つ10円の花火を二つ万引きしたんです。なんの苦労もなくてきちゃったんです。で、それが、いやでいやでね。ものすごい罪悪感があつて、それ以来、私は一度もそういうことはしませんでした。しないというか、できなかったんですね」

老人はうなずきもしなければ、こちらを見もしなかった。それでもなぜか、ちゃんと話を聞いてくれているという感覚が確かに私にはあった。私は子供の頃にしかした数々の失敗談や、どんなことに興味があり、どういうものを恐れていたのか。そんな話を、まるで子供が親に「ねえねえ聞いて」と今日学校であつた出来事を報告するような口調で話し続けた。

「だいたい遊び場所にはよく、怖いおじさんやおばさんが時々来て、

ボクらが悪さをするとこつぴどく叱るんです。今はもうそういうことはこのあたりでも少ないでしょうが、あれはあれでシツケとか道徳とか、地域が教育の一部分をきちんと担っていたのかもしれないね。友達同士の殴り合いの喧嘩だって、遠目から限度を越えないように……そう、まるでレフリーやらドクターがついてる試合のようなものでしたからね。こう見えてボクは警察に補導されたこと、何度かあるんですよ」

話をしているうちに、いつの間にか『私』から『ボク』に変わってしまった。そう、私はどこかの時点から意識して『私』と自分のことを言わなければ、思わず『ボク』と言いそうになっていたのだ。しかし、一度『ボク』と声に出してしまっただけからは、もう、抗うことの無意味さを思い知らされていた。そう、今『私』は『ボク』になって老人と話しているのだ。今はそれでいいじゃないか。

「パラダイムシフトって言葉があるんですけど、えっと、つまり大きな出来事があつて、それまでの価値観が変わってしまうっていう体験のことを言うんですが、ボクにとっては小学校から中学に上がった時がまさにそれでした。クラスでちょっとしたいじめ見たいのがありまして……どもの子で、クラスのみんなどあまりコミュニケーションが上手にとれてなかったんですね。で、あるときちょっとしたもめごとがあつて、それをきっかけに大きな騒ぎになっちゃつて、クラスの子、ほぼ全員でそのどもの子……確か竹田君っていったかな。その竹田君を取り囲んであわや集団暴行つて、そんな雰囲気になっちゃつて。それでボクはこれはマズイって思ってみんなを止めたんです。本当に怖かったんだけど、ボクはそういうことがとても嫌で……」

不意に老人が立ち止まる。私は意表を疲れて、思わず体のバランスを崩して、変な格好で立ち止まりつつ老人のいる方向に向きを変

えた。が、そこにあるべきもの——老人の姿は見えない。驚いてあたりを見渡す。不思議なことに、周りに人がいない。話に夢中になり、周りの景色にあまり気を配っていなかったがゆえか、或いは偶然にそういう状況ができていたのか。いや、それにしてもおかしい。この道に流れてきた人の数は、私が話しに夢中になっていてる間に全ての人がわき道にそれるなどということは考えられない。

どうやら私は、再び妄想の世界に迷い込んでしまったらしい。そしてやはり、それは現れた。

一匹の蝶が、どこからともなく現れた。それは小さく、しかし力強く羽ばたいている。白でもなく、黒でもなく、青のようでもあり、赤のようでもある。その蝶そのものが光っているのか、或いは光が蝶を包んでいるのか、弱弱しく、しかし暖かい光に包まれ、それは夜の街を彷徨う。私の目の前を二度三度と行ったり来たりを繰り返して、私の意識が十分に蝶に向けられたとたんに、蝶は少しずつ私から離れていく。私はどうしようもない不安に陥り、その蝶の後を追うしかなかった。その先に何があるかという不安よりも、蝶を見失う不安のほうが圧倒的で、絶望的に思えたのは、蝶の進む方向以外の風景は、すっかりと闇に閉ざされ、建物の形も道路の行方もすべていい加減になってしまっていたからである。選択肢はなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2404y/>

静かなる老人

2011年12月6日12時54分発行